

わが国戦前期の住宅の階段寸法に関する一考察

——戦前期に建てられた重要文化財の住宅を対象として——

古 俣 和 将

KOMATA Kazumasa

はじめに

(1) 研究背景

幕末、アメリカのマシュー・ペリー率いる艦隊の来航をきっかけとし開国した日本では、西洋の文化や技術の導入が顕著となり、住宅に関しても椅子座式の導入などの洋風化がみられた。こうした住宅形式に関しても欧米のものが導入される中で、近世とは異なった傾向がみられるようになる。そのひとつに住宅の重層化が挙げられる。すなわち、2階建て以上の住宅の増加である。日本の町屋などは近世から2階建てのものも存在していたが、専用住宅に関しては平屋が一般的であったとされている。しかし、明治以降2階建てを中心に重層化された住宅が増えたとされ、東京では2階建てが平屋より多くなるのは昭和2年から4年の間であり、昭和8年以降、2階建ての棟数が平屋の棟数のほぼ倍になったという⁽¹⁾（江面1990）。

著者は、これまで明治以降における2階建ての住宅の普及の中で、上下階を繋ぐ唯一の空間である階段のあり方も重視され始めたと考え、戦前期刊行の住宅関連書籍に記載された言説と間取り図の分析を通し、階段に関する分析を行ってきた。ちなみに、こうした観点による研究はこれまで行われておらず、2階建ての住宅の傾向を追っているもので、階段に注目した研究はなかった⁽²⁾（立川、丹波2003、江面1990）。以下、これまでの研究概要を紹介したい。

(2) 著者のこれまでの既往研究について

戦前期刊行の住宅関連書籍の言説をみると、従来の日本の住宅における階段は人目を避けた場所に急勾配な直線階段を配置するという特徴であったのに対し、西洋の住宅における階段は装飾的な役割を兼ねるため、玄関ホールに踊り場付きの折れ曲り階段を配置するというのが一般的な特徴であった。しかし、大正後期頃から従来の日本の住宅の階段は危険・不便であるため、折れ曲り階段を玄関ホールに設置することを推奨する記述が現れる。この推奨された階段の特徴は、西洋の住宅の階段の特徴と一致していることから、階段のあり方は、西洋の住宅のものをモデルとして考えられていたと推察された。一方、間取り図では、図集にみられた階段形状や配置場所は（表1、2）のように大別された。また、言説の分析のように伝統的な和風の住宅と西洋館などの洋風の住宅で分析を行うため、住宅の様式は、日本の伝統的な住宅である和館及びそれをベースに洋室等を取り入れた住宅を「和風系住宅」（図1）、西洋館などの洋館及びそれをベースに和室等を取り入れた住宅を「洋風系

(3) 住宅」(図2)とし、それぞれ分析を行った。その結果、洋風系住宅は明治後期から大正中期は折れ系階段を玄関ホールに配置する形式が一般的で、大正後期以降は踊り場付きの折れ系階段を設ける傾向が確認できた。それに対し、和風系住宅では、明治後期から大正中期では、直進系階段を廊下等に配置する傾向がみられ、大正後期から昭和初期では階段形状はそのまま配置場所が玄関ホールへと変化し、昭和初期以降踊り場付きの折れ系階段を玄関ホールに配置する形式へと移行していた(表3)。以上をまとめると、戦前期の日本の在来住宅を基本とした和風系住宅の階段は、その形状を直進系階段から折れ系階段へ、配置場所を廊下等から玄関ホールへと変化したことが確認された。この変化は、すなわち日本の住宅における階段の在り方は、西洋の住宅にみられる階段のあり方をモデルとしていたことを示すものと考えられた(古俣2014年)。(4)

しかし、戦前期の日本の在来住宅を基本とした和風系住宅の階段は、西洋の住宅にみられるような階段のあり方をモデルとしつつも、「日本住宅と西洋住宅に於いては階段の見方が違うのである。即ち日本住宅では実用にのみ用いるのであるが、西洋住宅ではこの階段は一種の装飾として設ける」(菊池1925:69-71)という記述のように、日本と西洋の階段に対する認識の違いから、西洋の住宅のような装飾の一つとして広く面積を取る折れ系Cタイプ(表4)の階段ではなく、面積をおさえ、階段下を廊下や押し入れに使用するといった日本的な折れ系Bタイプの階段が定着し、また、西洋の住宅をモデルとした洋風系住宅においてもその階段は、昭和初期頃から日本的な折れ系Bタイプの階段へと移行していたと考えられることを明らかとした。(7)

以上のようにこれまで文献資料をもとに研究を行ってきた。しかしながら、これらは文献上からみた成果であり、当時の理想と考えられていた姿を明らかとしたものともいえる。また、間取り図に関しては平面の分析のみで、具体的な階段の蹴上や踏面といった階段寸法は分析できていない。

そこで、本研究では実際に建築された住宅においても、同様な傾向がみられるかどうかを検証すべく、新たな分析を目指した。すなわち、現存住宅として、戦前期に建てられた国指定重要文化財の2階建ての住宅17例(表5)を分析対象とし、階段形状や配置場所といった階段のあり方をはじめ、階段の蹴上、踏面といった階段寸法の実測調査を行い、階段形状、配置場所、表階段と裏階段、和風や洋風といった住宅の様式による階段寸法の違いを検討することを目的としている。

表1 階段形状の種類

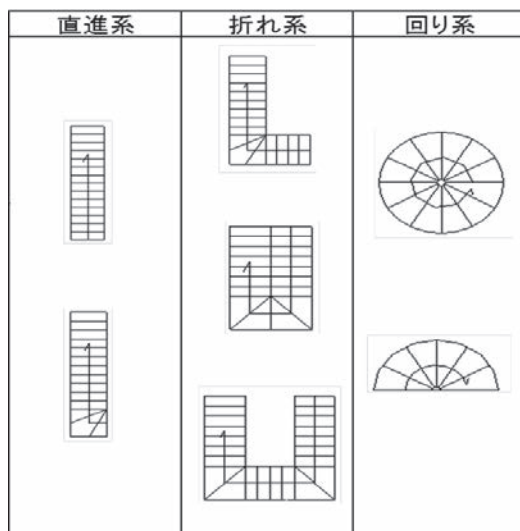
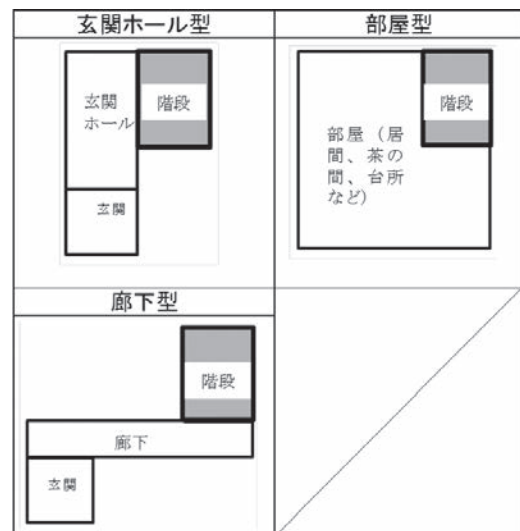


表2 階段配置の種類



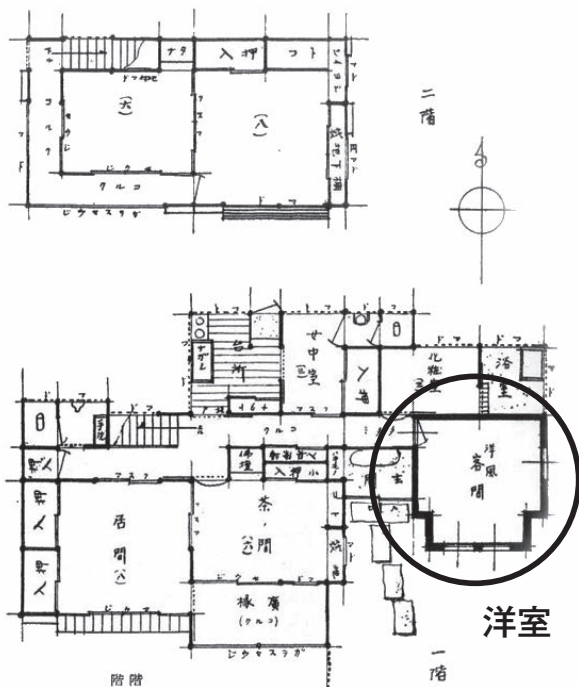


図1 和風系住宅の例

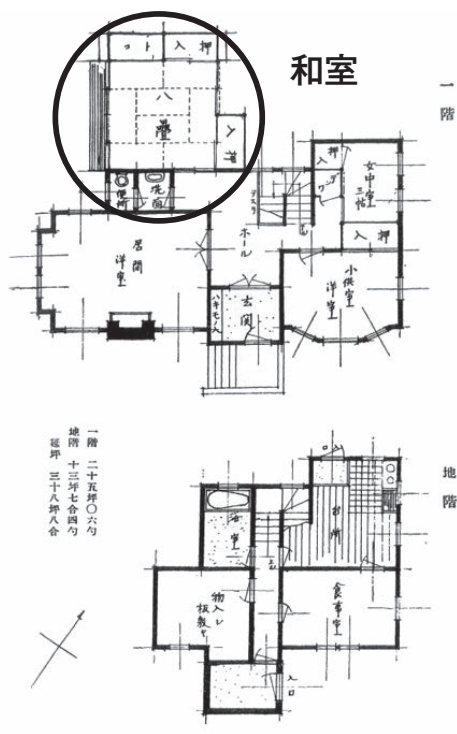


図2 洋風系住宅の例

表3 階段形状と階段配置の組み合わせの傾向

	明治後期から大正中期	大正後期から昭和初期	昭和初期以降
「洋風系住宅」	<p>「折れ系」・「玄関ホール型」</p>	<p>「折れ系」・「玄関ホール型」</p>	<p>「折れ系」・「玄関ホール型」</p>
「和風系住宅」	<p>「直進系」・「廊下型」</p>	<p>「直進系」・「玄関ホール型」</p>	<p>「折れ系」・「玄関ホール型」</p>

表4 折れ系階段の種類

タイプ	A	B	C
折れ系階段			

(3) 研究方法

ここで改めて、研究方法について触れたい。戦前期の住宅における階段について、住宅の様式、表⁽¹⁰⁾階段と裏階段、階段形状、階段配置による階段寸法の違いを明らかにするため、戦前期に建てられた

表5 研究対象17棟リスト

竣工年	建物名	所在地	様式
1877	M10	旧広瀬家住宅	愛媛県 和風系住宅
1888	M21	旧青木家那須別邸	栃木県 洋風系住宅
1890	M23	旧青山家住宅	山形県 和風系住宅
1895	M28	旧西尾家住宅	大阪府 和風系住宅
1896	M29	旧岩崎家住宅(洋館)	東京都 洋風系住宅
1903	M36	小林家住宅	兵庫県 洋風系住宅
1904	M37	旧高取家住宅(大座敷棟部分)	佐賀県 和風系住宅
1904	M37	旧トーマス住宅	兵庫県 洋風系住宅
1908	M41	天鏡閣	福島県 洋風系住宅
1910	M43	旧内田家住宅	神奈川県 洋風系住宅
1915	T7	旧高取家住宅(居室棟部分)	佐賀県 和風系住宅
1916	T5	旧毛利家本邸	山口県 和風系住宅
1919	T8	旧吉松家住宅	宮崎県 和風系住宅
1922	T11	萬翠荘	愛媛県 洋風系住宅
1927	S2	旧前田家本邸(洋館)	東京都 洋風系住宅
1929	S4	石谷家住宅	鳥取県 和風系住宅
1931	S6	旧鍋島家住宅	長崎県 和風系住宅

重要文化財のうち、現在一般公開しており、かつ実測の許可が得られた17棟を対象とし、階段の蹴上、踏面、幅(表5)の実測を行う。重要文化財を対象とする理由は、竣工年や増改築等が明らかとなっているものや、竣工当初の図面などの資料が残されているものが多いためである。戦前期(1868~1941年)の重要文化財のうち町屋などを除いた専用住宅の総数は61例で、2階建て以上の住宅は48例である。この48例のうち、現在一般公開され、かつ実測の許可が得られたものは17例であった(表5)。これ

表6 住宅関連書籍リスト

No.	著作者	タイトル	発行者	発行年
1	高橋鉄造	経済で便利な家の建て方	東亜堂書房	大正8年
2	太田作	住み心地よき家の建て方	弘学館	大正9年
3	納屋松藏	経済本位の住宅	鈴木書店	大正9年
4	笹治庄次郎	採光通風を主とする住みよき小住宅の設計	鈴木書店	大正9年
5	近間佐吉	住み心地好き中流住宅	博文館	大正9年
6	藤根大庭	理想の文化住宅	アルス	大正12年
7	西村伊作	現代人の新住宅	文化生活研究会	大正13年
8	W・M・ヴォーリズ	吾家の設計	文化生活研究会	大正13年
9	藤井渥	簡易洋風住宅の設計	鈴木書店	大正13年
10	菊池修一郎	住み心地よき住宅と庭園	服部文貴堂	大正14年
11	葛野壯一郎	住宅を新築せんとする人の為に	人文社	大正14年
12	坂口利夫	十坪より五十坪迄 模範住宅の設計	鈴木書店	大正15年
13	西村伊作	現代人の新住家	文化生活研究会	大正15年
14	木曾怒一	住宅と建築	誠文堂	昭和3年
15	刀禰館正雄	朝日家庭業書 住の巻	朝日新聞	昭和5年
16	山本拙郎	和洋住宅設備設計の知識	実業之日本社	昭和6年
17	増山新平	新時代の住宅設備	太陽社書店	昭和6年
18	主婦之友社	初めて家を建てる人に必要な住宅の建て方	主婦之友社	昭和6年
19	上原敬二	家の改造と庭の改造	金星堂	昭和6年
20	張菅雄	中流住宅	逓信協会	昭和7年
21	京都建築協会	家を建てる人の為に	京都土木建築新聞社	昭和7年
22	富永襄吉	中流住宅建築	資文堂書店	昭和8年
23	佐久間田之助	日本建築工作法	吉田工務所出版部	昭和10年
24	武田五一	住宅建築要義	文献書院	昭和12年
25	平尾善保	最新住宅読本	日本電話建物株式会社出版部	昭和13年
26	西村久二	新住宅の設計と施工	第一書房	昭和14年
27	長尾勝馬	新しい住宅の間取り	横山書店	昭和15年
28	廣江文彦	理想の小住宅	鈴木書店	昭和15年
29	西田竹治	新住宅の研究	コロナ社	昭和16年

ら17例の竣工年代をみると、明治から昭和初期まで、年数に大きな間隔を空けずに存在することから、あるひとつの傾向について読み取ることは可能であると考えられ、これらを本研究の分析対象とした。

また、実測により得た階段寸法のデータをもとに、大正8年に公布された市街地建築物法の階段の規定や、建築家たちが推奨した階段寸法と比較、検討を行う。建築家たちが推奨した階段の記述に関しては、国立国会図書館所蔵の書籍より、「住宅」、「家」というキーワードで検索された戦前期の住宅関連の書籍のうち、目次に「階段」の項目があるもの計29冊を主資料とした(表6)。

I 戦前期に建てられた重要文化財指定の住宅の階段寸法について

(1) 本研究対象の各住宅について

以下、和風系住宅と洋風系住宅ごとに、各住宅について基礎データや階段寸法について述べていく。

(1-1) 旧青山家住宅⁽¹¹⁾

- 基礎データ

所在地：山形県飽海郡遊佐町大字比子字青塚

155

竣工年：1890年(明治23年)

設計者：不明

建物面積：327.21 m²

構造形式：木造2階建て

重用文化財指定年月：2000年12月4日

備考：なし

- 概要

旧青山家住宅は、北海道でのニシン漁で道内の有数の漁業家として功を成した青山留吉が、自身の故郷である遊佐町に明治23年に建てた日本の伝統的な様式を用いた住宅である。明治29年に小座敷が増築されているが、竣工当時とほとんど変更なく現在の姿に至り、2000年12月4日に重要文化財に指定された。

旧青山家住宅の居室は畳敷きの和室を中心としており、本研究では「和風系住宅」とする。平面は連続した部屋で構成され、庄内地方でよくみられる茶の間～中の間～下座敷～上座敷と続く間取り構成である。2階は2カ所あり、両方とも使用人の部屋である。男性女性と分け、使用していたとのことである。男性用の2階へ接続する表階段は、「部屋配置型」で直進系階段であり、2階が使用人の部屋であることから、使用人用の階段であることがわかる。その階段寸法は踏面平均5寸8分、蹴上平均1尺2分であり、勾配は61度と急勾配な階段となっている。階段の幅は2尺7寸3分である。女性用の2階へ接続する裏階段は、「部屋配置型」で直進系階段であり、こちらも使用人用の階段である。その階段寸法は踏面平均6寸3分、蹴上平均8寸7分であり、勾配は63度とこちらも急勾配な階段となっている。このように急勾配な階段となっていることは、2階が接客や家族の空間でなく、使用人の部屋であることが要因として考えられる。



写真1 旧青山家住宅(撮影日:2014.12.18)

表7 旧青山家住宅 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1890	M23	旧青山家住宅	和風系住宅	表	直進系階段	5寸8分	1尺2分	61	2尺7寸3分	8尺2寸1分	なし	部屋配置型	茶の間、使用人室、台所	使用人室	1階
				裏	直進系階段	6寸3分	8寸7分	63	1尺4寸5分		なし	部屋配置型	勝手口、脱衣所、勝手、茶の茶		

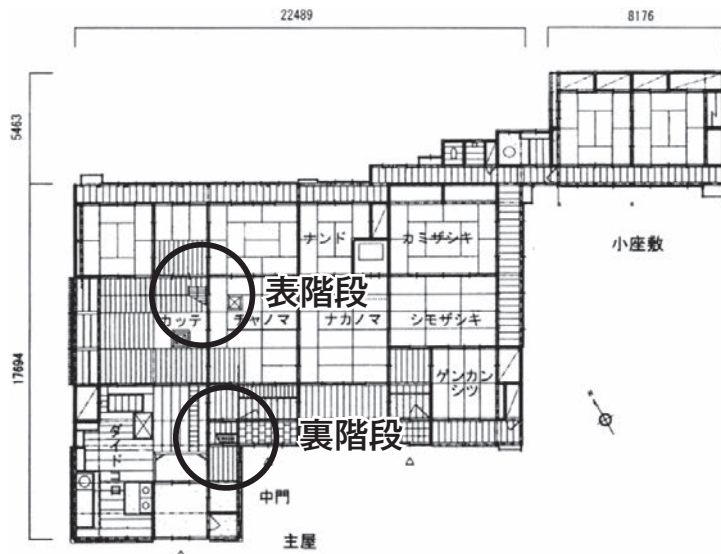


図3 旧青山家住宅1階平面図 文化庁文化財部『月刊文化財(448号):14-17、28-31』(第一法規株式会社2001)



写真2 表階段(撮影日:2014.12.18)



写真3 裏階段(撮影日:2014.12.18)

(1-2) 旧西尾家住宅⁽¹²⁾

・基礎データ

所在地:大阪府吹田市内本町2-15-11

竣工年:1895年(明治28年)

設計者:不明

建物面積:498.96 m²

構造形式:木造2階建て

重用文化財指定年月:2009年12月8日

備考:表階段は取り壊されているため実測不可。



写真4 旧西尾家住宅(撮影日:2014.11.19)

・概要

旧西尾家住宅は、近世末には仙洞御料の庄屋を務め、明治になると地主、山林業を営んだ西尾家の11代與右衛門養成によって建てられた日本の伝統的な和風の意匠の住宅である。数寄屋風を基調とし、洋風意匠を取り入れた住宅となっている。大正15年、武田五一の設計により平屋建ての離れが建てられた。2009年12月8日に重要文化財に指定された。旧西尾家住宅の居室は全て畳敷きの和室で構成され、本研究では「和風系住宅」と分類する。平面は連続した部屋で構成されている。2階は座敷や寝室で構成された家族接客兼用の空間である。2階へ接続する表階段は、中間に直進系階段が配置されていたが、現在は取り壊されているため寸法は不明である。裏階段は「廊下配置型」であり、居間に隣接している。収納と昇降を兼ねた、いわゆる箱階段と称されるもので、直進系階段である。居間付近に配置されていることから、家族や使用人用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均5寸4分、蹴上平均8寸2分であり、勾配は57度となっている。階段の幅は2尺9寸7分である。

表8 旧西尾家住宅 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1895	M28	旧西尾家住宅	和風系住宅	裏	直進系階段	5寸4分	8寸2分	57	2尺9寸7分	10尺6寸9分	なし	廊下配置型	座敷、次の間2、和室3	座敷、次の間、寝室、和室2	1.2階

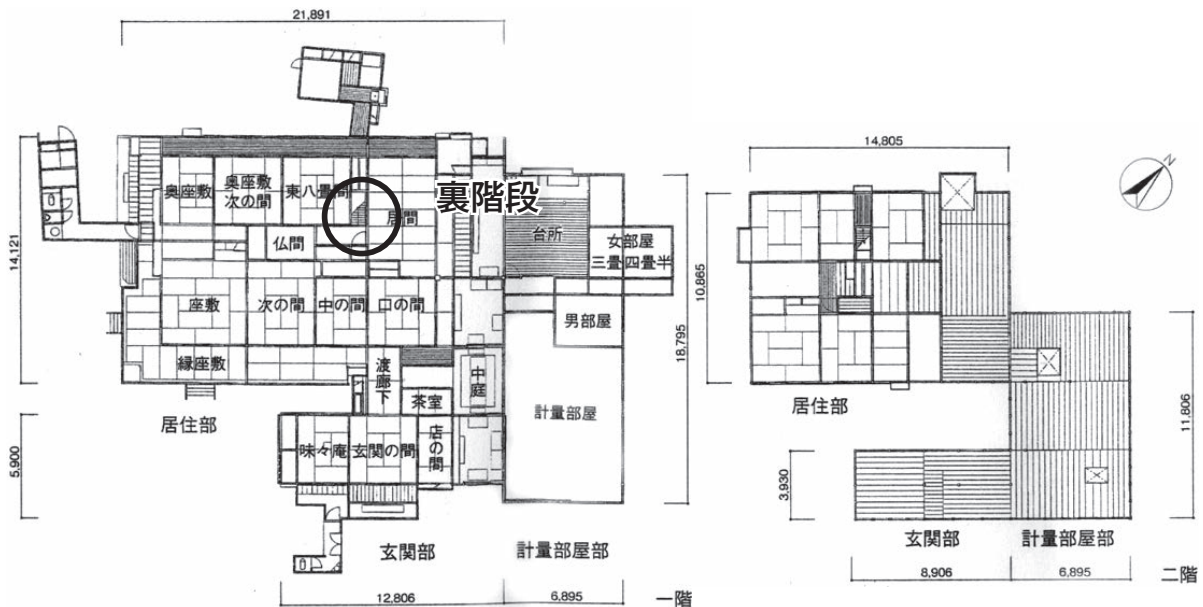


図4 旧西尾家住宅1、2階平面図 文化庁文化財部『月刊文化財(555号):12-20』(第一法規株式会社2009)



写真5 裏階段（撮影日：2014.11.19）

(1-3) 旧広瀬家住宅⁽¹³⁾

• 基礎データ

所在地：愛媛県新居浜市上原 2-3904-2

竣工年：1877年頃（明治10年）

設計者：八木甚兵衛

建物面積：409.82 m²

構造形式：木造2階建て

重要文化財指定年月：2003年5月30日

備考：表階段は明治31年に直進系階段から折れ系階段へと改造。裏階段は管理上等の関係から実測不可。



写真6 旧広瀬家住宅（撮影日：2014.12.27）



写真7 表階段（撮影日：2014.12.27）

・概要

旧広瀬家住宅は住友家（本店）の広瀬幸平の住宅である。日本の伝統的な様式を用いているが、西洋から輸入されたマントルピース、洋式の便所や板ガラス、避雷針といった新しい文化を取り入れた、近代和風住宅と称されている住宅である。母屋が明治10年に現在の場所から北へ約4km離れた旧金子村の久保田で竣工され、明治18年に現在の場所に移転された。明治22年には付属の新座敷と庭園が大阪の棟梁八木甚兵衛と植木屋清兵衛の手によって竣工した。その後、大正・昭和初期にかけて南庭や中之町池（亀池）周辺の整備が行われ、今日みられる姿となり、2003年5月30日に重要文化財に指定された。

旧広瀬家住宅の居室は全て畳敷きの和室で構成され、本研究では「和風系住宅」と分類する。平面は連続した部屋で構成されている。2階は2カ所あり、①居間、座敷付近から上がる望煙楼と名付けられた展望室があり、主に接客空間としての2階、②土間から上がり、2階は施主である広瀬幸平の長男、満正が主に生活空間として使用していた2階がある。①の2階に接続する階段は、「廊下配置型」で、ふたつ上り口がある踊り場付きの折れ系階段であり、2階が接客空間を中心とした構成から、接客用の階段と推察される。しかし、もとは直進系の階段であり、明治31年に、客人を座敷から通しやすくするため現在の折れ系階段へと改造されたという。その階段寸法は踏面平均6寸6分、蹴上平均7寸5分であり、勾配は48度となっており、階段の幅は2尺3寸9分である。

表9 旧広瀬家住宅 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客	
1877	M10	明治31年	旧広瀬家住宅	和風系住宅	表	折れ系階段	6寸6分	7寸5分	48	2尺3寸9分	11尺2寸3分	あり	廊下配置型	座敷、次の間、居間2、茶の間、和室	座敷2、次の間、書斎	1.2階

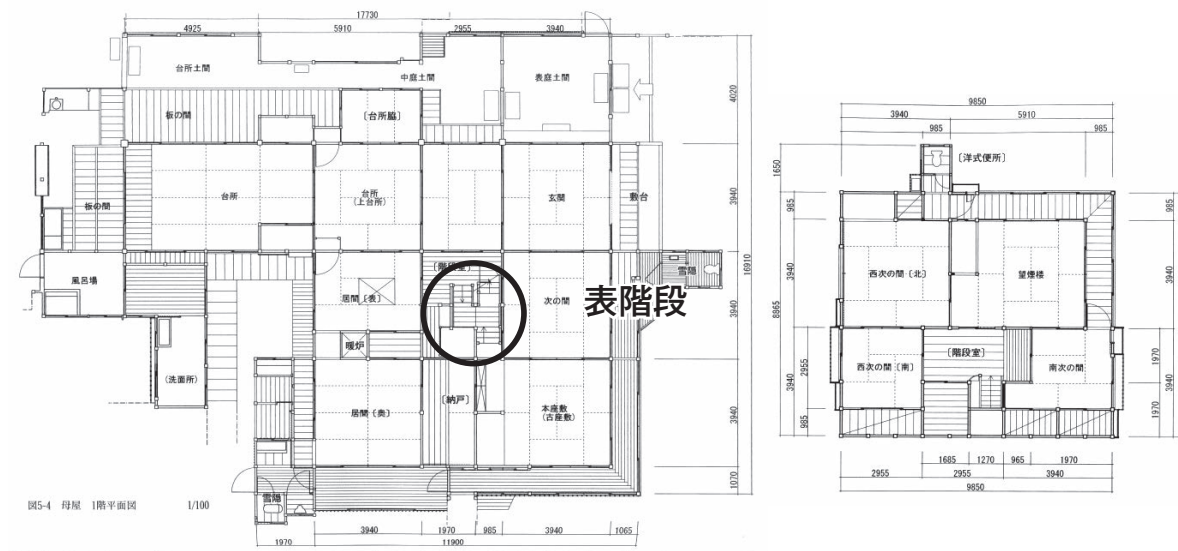


図5 旧広瀬家住宅1、2階平面図 旧広瀬邸文化財調査委員会『別子銅山の近代化を見守った広瀬邸——旧広瀬邸建造物調査報告書——』（新居浜市教育委員会2002）

(1-4) 旧高取家住宅⁽¹⁴⁾

・基礎データ

所在地：佐賀県唐津市北城内5-40

竣工年：1904年（明治37年）

設計者：不明

建物面積：861.3 m²

構造形式：木造2階建て

重用文化財指定年月：1998年12月25日

備考：写真撮影不可。

・概要

旧高取家住宅は、唐津炭田を近代化や、杵島炭坑などの経営で成功した「肥前の炭坑王」と呼ばれる高取伊好の邸宅として、明治37年に建てられた和風の住宅である。和風を基調としながらも洋風の応接室を持つなど同時代の邸宅の特色を備える一方、能舞台を設けるなど他に類をみない構成を持つ点に特徴がある。建具や欄間の手の込んだ意匠や、アール・ヌーヴォーのデザインのランプシェードなどには、儒学者の家に生まれ、西洋の技術を学んだ高取伊好の思想や教養が色濃く反映されている。現在の大広間棟が竣工当時のもので、その後、明治43年に茶室が、大正8年に洋風の応接室を含む居住棟が、最後に昭和3年に仏間が増築された。1998年12月25日に重要文化財に指定された。

旧高取家住宅の居室は和室を中心とし、玄関横に洋風の応接室を配した構成で、本研究では「和風系住宅」と分類する。平面は中庭を中心に片廊下や中廊下で部屋を接続した構成である。2階は2カ所あり、①座敷や次の間で構成された接客用の2階、②座敷を中心とした接客用の2階である。①へ接続する表階段は「玄関ホール配置型」であり、客人を2階へ通しやすくなっている。形状は直進系階段であり、2階が接客用の空間であることから、接客用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均6寸9分、蹴上平均5寸9分であり、勾配は44度となっている。階段の幅は4尺4分1寸である。裏階段は「廊下配置型」で昭和3年に増築された茶室に隣接した、踊り場付きの折れ系階段である。主人の居間である中座敷や茶室から客人を2階へ通していたとのことであり、表階段にはない踊り場があることから接客用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均6寸5分、蹴上平均6寸6分であり、勾配は45度となっている。階段の幅は3尺で、表階段よりも広くつくられている。②の2階への表階段は、「廊下配置型」で、内玄関の側に配置され、直進系階段である。2階が接客用の空間であることから、接客用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均8寸7分、蹴上平均6寸2分であり、勾配は36度となっている。階段の幅は3尺4寸4分である。裏階段は「廊下配置型」で、直進系階段である。台所に隣接していることから、使用人用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均8寸7分、蹴上平均6寸2分であり、勾配は36度となっている。階段の幅は3尺である。



写真8 旧高取家住宅（撮影日：2015.1.21）

表 10 旧高取家住宅 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1904	M37	高取家住宅 (大座敷棟部分)	和風系住宅	表(接客)	直進系階段	6寸9分	5寸9分	44	4尺4寸1分	10尺3分	なし	玄関ホール配置型	玄関、座敷(能舞台等)、廊下、便所	座敷2、次の間	1.2階
				裏(接客)	折れ系階段	6寸5分	6寸6分	45	3尺	10尺3分	あり	廊下配置型	茶室、座敷(能舞台等)、廊下	座敷2、次の間	1.2階
1915	T7	高取家住宅 (居室棟部分)	和風系住宅	表(家族)	直進系階段	8寸7分	6寸2分	36	3尺4寸4分	10尺3分	なし	廊下配置型	廊下、内玄関、書生室、和室、座敷、玄関	座敷4	1.2階
				裏(家族)	直進系階段	8寸7分	6寸2分	36	3尺	10尺3分	なし	廊下配置型	和室、台所、廊下	座敷4	1.2階

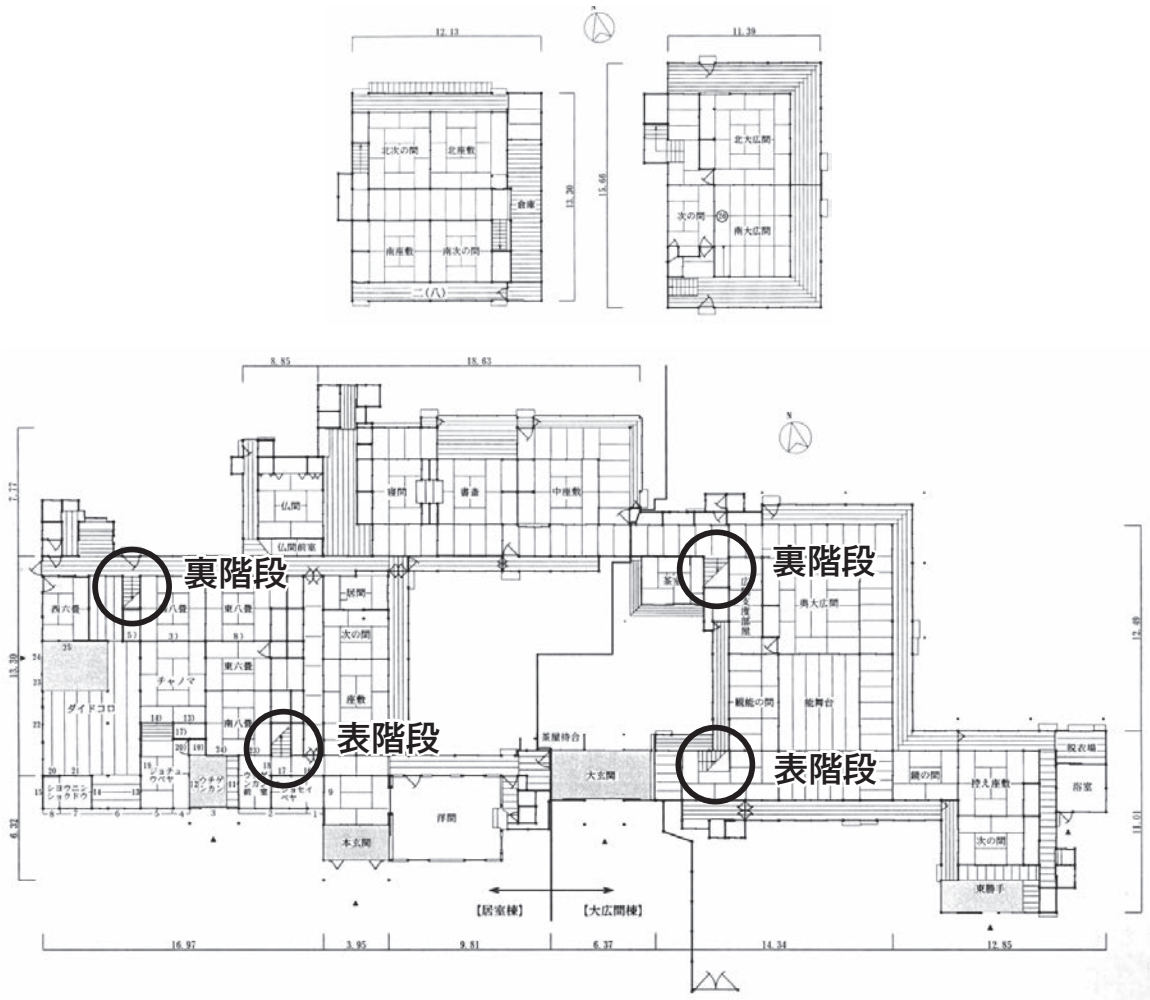


図6 旧高取家住宅1、2階平面図 『旧高取家 主屋(居室棟・大広間棟)他7棟 保存修理工事報告書』(唐津市教育委員会 2002)

(15)
(1-5) 旧毛利家本邸

・基礎データ

所在地：山口県防府市多々良 1-15-1

竣工年：1916年(大正5年)

設計者：原竹三郎

建物面積：1002.80 m²

構造形式：木造2階建て

重要文化財指定年月：2011年11月29日

備考：なし



写真9 旧毛利家住宅(撮影日：2015.3.26)

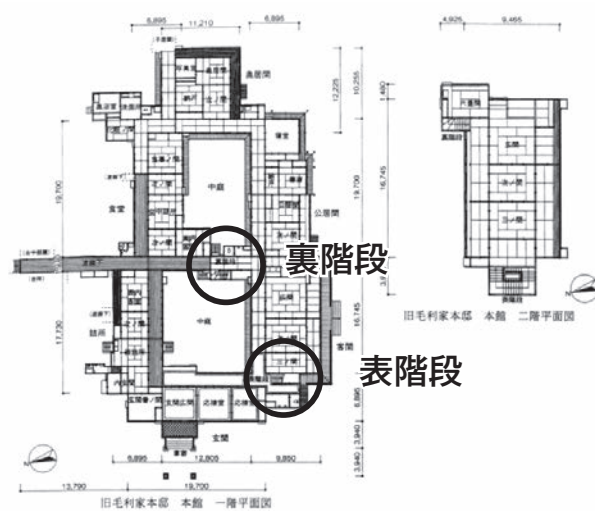
• 概要

旧毛利家本邸は旧長洲藩主の毛利宗家が邸宅として、1916年（大正5年）に原竹三郎の設計により建てられた伝統的な和風の意匠の住宅である。上質な材料や高度な木造技術による贅沢な意匠でまとめるとともに、コンクリート造や鉄骨造、機能的な配置計画など近代的な建築手法を取り入れており、近代和風住宅と称されるものである。2011年11月29日に重要文化財に指定された。

旧毛利家本邸の居室は和室を中心に構成され、本研究では「和風系住宅」と分類する。平面は客間や居間、詰所など機能ごとに分けた各棟を、中庭を囲んでコの字に並べ、それらを片廊下で繋いだ構成になる。2階は座敷や次の間で構成され、接客用の空間である。2階へ接続する表階段は「廊下配置型」で、コの字型をした踊り場付きの折れ系階段であり、2階が接客用の空間であることから接客用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均8寸、蹴上平均7寸4分であり、勾配は37度となっている。階段の幅は平均4尺6寸2分である。裏階段は「廊下配置型」で、台所から伸びた直線の廊下に設けられていることから、使用人用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均8寸5分、蹴上平均7寸1分であり、勾配は40度となっている。階段の幅は3尺9寸9分である。

表 11 旧毛利家住宅 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1916	T5	旧毛利家本邸	和風系住宅	表	折れ系階段	8寸	6寸	37	4尺6寸2分	16尺8寸6分	あり	廊下配置型	応接室、次の間、便所	座敷、次の間2、和室	1.2階
	裏			直進系階段	8寸5分	7寸1分	40	3尺9寸9分	なし		廊下配置型				



→写真10 表階段
(撮影日：
2015.3.26)



←写真11 裏階段
(撮影日：
2015.3.26)

図7 旧毛利家住宅1階、2階平面図 文化庁文化財部『月刊文化財(579号):4-5、15-29』(第一法規株式会社2011)

(16)
(1-6) 旧吉松家住宅

- 基礎データ

所在地：宮崎県串間市大字西方 5509

竣工年：1919年（大正8年）

設計者：不明

建物面積：542.2 m²

構造形式：木造2階建て、地下1階

重要文化財指定年月：2008年12月2日

備考：なし

- 概要

旧吉松家住宅は近世末に庄屋を務め、明治以降山林の経営で串間のほとんどの山林を所有した吉松家の邸宅として、1919年（大正8年）に建てられた伝統的な和風の意匠の住宅である。良材を用いた上質なつくりで、座敷飾りや、応接室の設えは優れた意匠である。2008年12月2日に重要文化財に指定された。

旧吉松家住宅の居室は畳敷きの和室を中心に、洋室の応接室を設けた構成で、本研究では「和風系住宅」と分類する。平面はコの字形のプランで、片廊下で居室部、座敷部、大広間部、離れ部、台所部、奥座敷部を繋ぐ。2階は座敷、次の間、書斎からなっており、接客用の空間である。2階へ接続する階段は「廊下配置型」で、上がり口が二方向に分かれた踊り場付きの折れ系階段であり、2階が接客用の空間であることから接客用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均7寸4分、蹴上平均8寸であり、勾配は47度となっている。階段の幅は平均3尺1寸6分である。



写真12 旧吉松家住宅（撮影日：2015.1.23）

表12 旧吉松家住宅 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1919	T8	旧吉松家住宅	和風系住宅	表	折れ系階段	7寸4分	8寸	47	3尺1寸6分	9尺6寸2分	あり	廊下配置型	内玄関、茶の間、食堂	書斎、座敷、次の間	1,2階

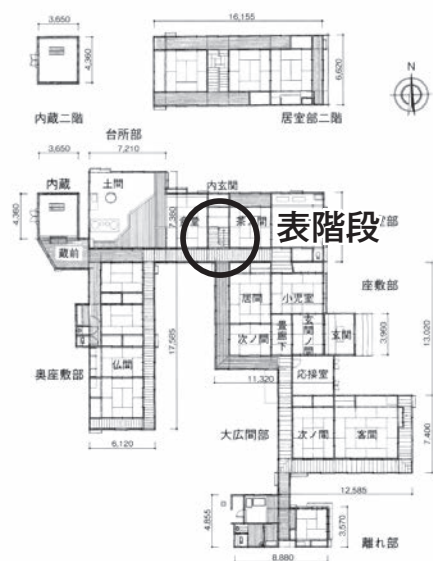


図8 旧吉松家住宅1階、2階平面図 文化庁文化財部『月刊文化財（543号）：18-20』（第一法規株式会社2008）



写真13 表階段（撮影日：2015.1.23）

(1-7) 石谷家住宅⁽¹⁷⁾

- 基礎データ

所在地：鳥取県八頭郡智頭町大字智頭 396

竣工年：1929年（昭和4年）

設計者：田中力蔵

建物面積：350.77 m²

構造形式：木造2階建て

重要文化財指定年月：2009年12月8日

備考：なし

- 概要

石谷家住宅は、「塩屋」と号して米や醸造品を扱った商家で、明治以降、山林経営を拡大した石谷家の邸宅として1929年（昭和4年）に建てられた伝統的な和風の意匠の住宅である。



写真14 石谷家住宅（撮影日：2014.12.26）

表13 石谷家住宅 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1929	S4	石谷家住宅	和風系住宅	表裏	折れ系階段	7寸9分	7寸	42	2尺9寸7分	10尺6寸7分	なし	廊下配置型	次の間、座敷	座敷2、次の間3、	1.2階
					裏	7寸6分	6寸6分	49	2尺7寸7分		あり	廊下配置型	広間、勝手	神殿	

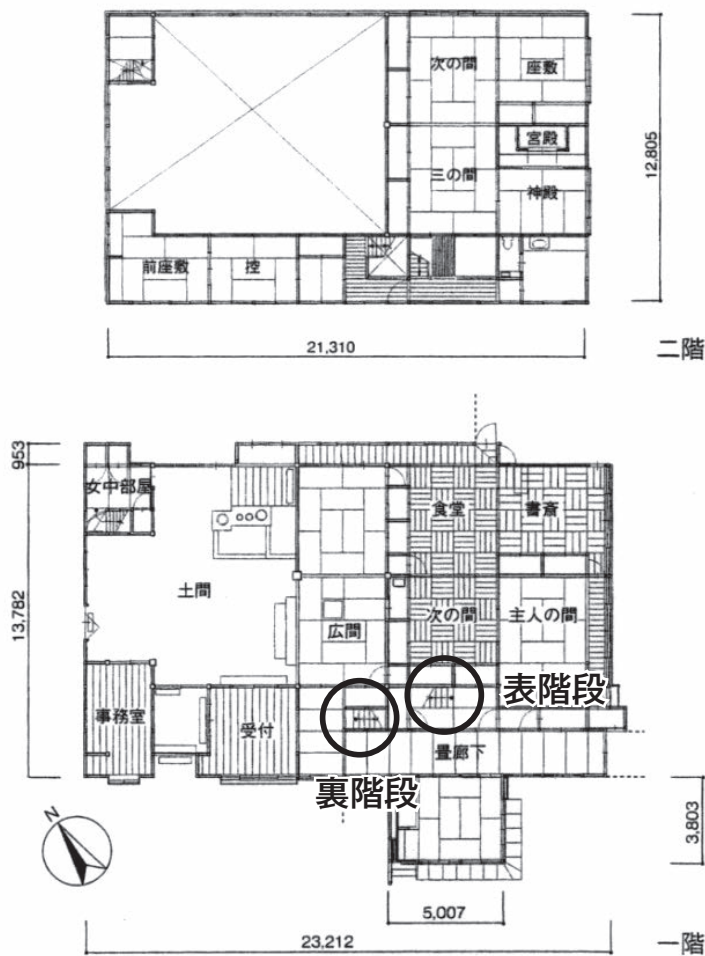


図9 石谷家住宅1階、2階平面図 文化庁文化財部『月刊文化財（55号）：12-20』（第一法規株式会社2009）



写真15 表階段（撮影日：2014.12.26）



写真16 裏階段（撮影日：2014.12.26）

智頭地方特産の良質な杉材などの銘木を用い、主屋は高度な架構技術により宏壮な土間空間をつくとともに、各座敷の細部意匠も優れた近代和風住宅と称される住宅である。2009年12月8日に重要文化財に指定された。

石谷家住宅の居室は畳敷きの和室を中心に構成され、本研究では「和風系住宅」と分類する。平面は連続した部屋の構成が中心である。2階は座敷や次の間等で構成され、接客用の空間である。2階へ接続する表階段は「廊下配置型」で、踊り場のない折れ系階段であり、2階が接客用の空間であることから接客用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均7寸9分、蹴上平均7寸であり、勾配は41度となっている。階段の幅は平均2尺9寸7分である。裏階段は折れ系階段であり、炊事場のある土間空間付近に配置されていることから使用人用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均7寸6分、蹴上平均6寸6分であり、勾配は49度となっている。階段の幅は平均2尺7寸7分である。

(1-8) 旧鍋島家住宅⁽¹⁸⁾

・基礎データ

所在地：長崎県雲仙市国見町神代丙 103-1

竣工年：1930年（昭和5年）

設計者：不明

建物面積：387.52 m²

構造形式：木造2階建て

重要文化財指定年月：2007年6月18日

備考：隠居棟の階段は耐久性の関係から実測不可。

・概要

旧鍋島家住宅は神代鍋島家の邸宅として1930年（昭和5年）に建てられた伝統的な和風の意匠の住宅である。和風の意匠を基本とし、座敷飾りや天井や板欄間など各部の造作が丁寧につくられている住宅である。江戸後期に隠居棟、明治中期に座敷棟が建ち、その後母屋が建てられ、現在に至る。2007年6月18日に重要文化財に指定された。

旧鍋島家住宅の居室は畳敷きの和室を中心に構成され、本研究では「和風系住宅」と分類する。平面は中庭を囲んで建つ玄関部、客間部、居間部、家政部で構成され、それらを片廊下で繋いでいる。2階は2カ所あり、①座敷と次の間で構成された2階、②家族の寝室で構成された2階の2カ所である。①の2階へ接続する表階段は「廊下配置型」で、直進系階段であり、2階が接客用の空間であることから接客用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均7寸、蹴上平均6寸9分であり、勾配は45度となっている。階段の幅は2尺9寸8分である。②の2階へ接続する裏階段は直進系階段であり、2階が家族用の空間であることから家族用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均6寸9分、蹴上平均6寸9分であり、勾配は45度となっている。階段の幅は平均2尺8寸6分である。



写真17 旧鍋島家住宅（撮影日：2015.1.22）

表 14 旧鍋島家住宅 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1931	S6	旧鍋島家住宅	和風系住宅	表裏	直進系階段	7寸	6寸9分	45	2尺9寸8分	11尺1寸	なし	廊下配置型	玄関、客間、和室	座敷、次の間	1.2階
					直進系階段	6寸9分	6寸9分	45	2尺8寸6分		なし	廊下配置型	居間	寢室2	1階

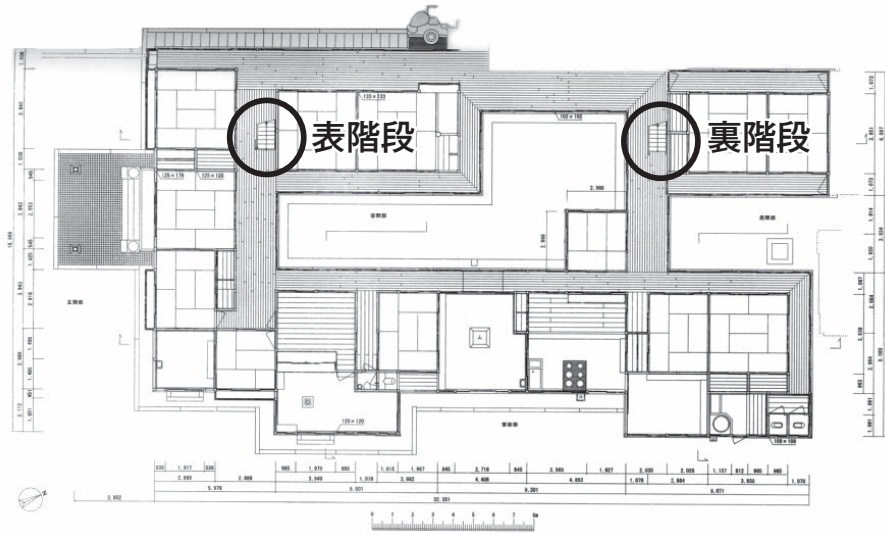


図 10 旧鍋島家住宅 1階平面図 文化庁文化財部『月刊文化財(614号):24-26』(第一法規株式会社 2014)

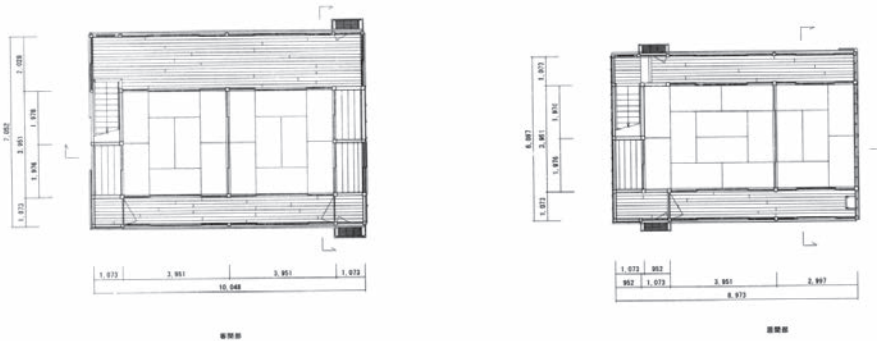


図 11 旧鍋島家住宅 2階平面図 文化庁文化財部『月刊文化財(614号):24-26』(第一法規株式会社 2014)



写真 18 表階段 (撮影日: 2015. 1. 22)



写真 19 裏階段 (撮影日: 2015. 1. 22)

(19)
 (1-9) 旧岩崎家住宅 (洋館)

• 基礎データ

所在地：東京都台東区池之端 1-3-45

竣工年：1896年 (明治29年)

設計者：ジョサイア・コンドル

建物面積：531.5 m²

構造形式：木造2階建て、煉瓦蔵地下1階

重用文化財指定年月：1961年12月28日

備考：裏階段は耐久性の関係から実測不可。

和館は一部現存。写真撮影不可。



写真 20 旧岩崎家住宅 (洋館) (撮影日：2015.3.4)

• 概要

旧岩崎家住宅 (洋館) は、三菱の創始者である岩崎家の邸宅として、1896年 (明治29年) に日本の建築界の父ともいわれるジョサイア・コンドルの設計で建てられた洋風の住宅である。下見板張りで南面に大きなヴェランダを配し、内部はイスラム風の装飾で飾られた住宅で、明治期の上流階級の邸宅の特徴である和館と洋館を並列した住宅である。1961年12月28日に重要文化財に指定された。

旧岩崎家住宅 (洋館) の居室は洋室を中心に構成され、本研究では「洋風系住宅」と分類する。平面は玄関ホールを中心とした構成である。2階は客室や寝室で構成された家族接客兼用の空間である。2階へ接続する階段は「玄関ホール配置型」で、コの字型をした踊り場付きの折れ系階段であり、2階が家族と接客用の空間であることから家族接客兼用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均1尺、蹴上平均5寸9分であり、勾配は32度となっている。階段の幅は4尺2寸9分である。

表 15 旧岩崎家住宅 (洋館) 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1896	M29	旧岩崎家住宅 (洋館)	洋風系住宅	表	折れ系階段	1尺	5寸9分	32	4尺2寸9分	16尺	あり	玄関ホール配置型	応接室、食堂、客室、婦人客室、書斎、配膳室、玄関ホール	客室2、婦人客室、寝室3、居室2、浴室、便所	1.2階

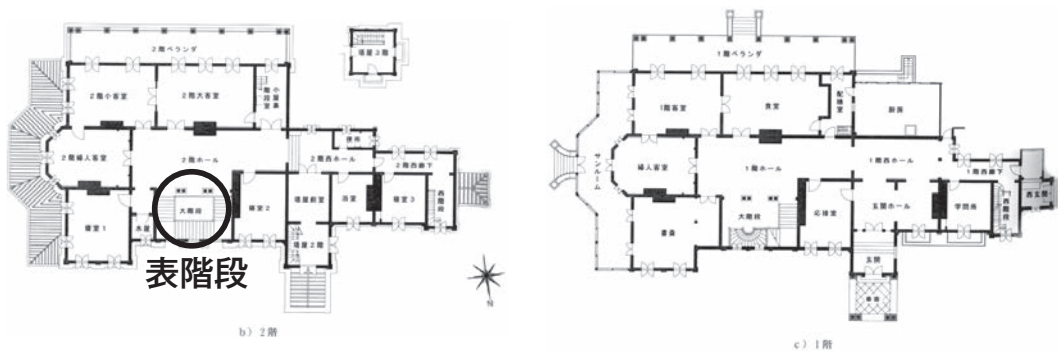


図 12 旧岩崎家住宅 1、2階平面図 財団法人文化財建造物保存技術協会『重要文化財 旧岩崎家住宅 (洋館・撞球室・大広間・附煉瓦塀) 保存修理工事報告書』(文化庁 2005)

(1-10) 小林家住宅 (旧シャープ住宅)⁽²⁰⁾

・基礎データ

所在地：兵庫県神戸市中央区北野町 3-77-2

竣工年：1903 年頃 (明治 36 年)

設計者：A. N. ハンセル

建物面積：210.4 m²

構造形式：木造 2 階建て

重用文化財指定年月：1980 年 12 月 18 日

備考：なし

・概要

小林家住宅は、明治 19 年に来日し、明治 41 年まで神戸に住み、神戸のアメリカ総領事となったハンター・シャープの邸宅として明治 36 年に建てられた洋風の住宅である。シャープが神戸を去った後、昭和 19 年に小林秀雄 (元神戸電鉄社長) が昭和 53 年まで住んでいたとされる。下見板張りの外観で、建物前方にヴェランダを配置している点に大きな特徴がある。1980 年 12 月 18 日に重要文化財に指定された。

小林家住宅の居室は洋室を中心に構成され、本研究では「洋風系住宅」と分類する。平面は玄関ホールを中心とした構成である。2 階は寝室や子供室で構成された家族用の空間である。2 階へ接続する階段は「玄関ホール配置型」で、コの字型をした踊り場付きの折れ系階段であり、2 階が家族用の空間であることから家族用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均 7 寸 8 分、蹴上平均 6 寸 4 分であり、勾配は 39 度となっている。階段の幅は平均 3 尺 7 寸 7 分である。



写真 21 小林家住宅 (撮影日：2015. 3. 17)

表 16 小林家住宅 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1903	M36	小林家住宅	洋風系住宅	表	折れ系階段	7寸8分	6寸4分	39	3尺7寸7分	13尺5寸3分	あり	玄関ホール配置型	応接室、食堂、書斎、廊下	寝室2、子供室、化粧室、浴室	1階

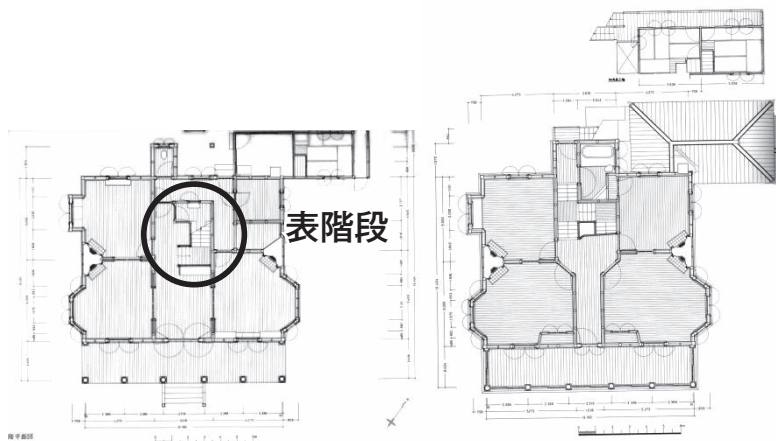


図 13 小林家住宅 1 階 (左)、2 階 (右) 平面図 財団法人文化財建造物保存技術協会『重要文化財小林家住宅修理工事報告書』(重要文化財小林家住宅修理委員会 1989)



写真 22 表階段 (撮影日：2015. 3. 17)

(1-11) 旧トーマス住宅⁽²¹⁾

・基礎データ

所在地：兵庫県神戸市中央区北野町 3-13-3

竣工年：1910 年（明治 42 年）

設計者：ゲオルグ・デ・ラランデ

建物面積：230.12 m²

構造形式：木造 2 階建て

重用文化財指定年月：1978 年 1 月 21 日

備考：なし

・概要

旧トーマス住宅は、ドイツ人の貿易商ゴッドフリート・トーマスの邸宅としてドイツ人建築家ゲオルグ・デ・ラランデの設計により 1904 年（明治 37 年）に建てられた洋風の住宅である。ドイツ風ネオ・ゴシックの傾向の強い意匠であるものの、内部には間仕切りや天井、建具、家具の飾り金具に自然な曲線を取り入れるなど、アール・ヌーヴォーの装飾がみられる。大正の初め日本人の手に渡り、さらに中華同文学校の所有になった。1978 年 1 月 21 日に重要文化財に指定された。

旧トーマス住宅の居室は洋室を中心に構成され、本研究では「洋風系住宅」と分類する。平面は玄関ホールを中心とした構成である。2 階は客間や客用寝室と家族用寝室等を設け、家族と接客兼用の空間である。2 階へ接続する階段は「玄関ホール配置型」で、コの字型をした踊り場付きの折れ系階段であり、2 階が家族接客兼用の空間であることから家族接客兼用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均 8 寸 9 分、蹴上平均 6 寸 2 分であり、勾配は 35 度となっている。階段の幅は平均 4 尺 8 分である。



写真 23 旧トーマス住宅（撮影日：2015.3.17）

表 17 旧トーマス住宅 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1904	M37	旧トーマス住宅	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸9分	6寸2分	35	4尺8分	13尺8寸2分	あり	玄関ホール配置型	書斎、応接室、食堂、居間	客間、客用寝室、寝室2、化粧室、浴室	1.2階

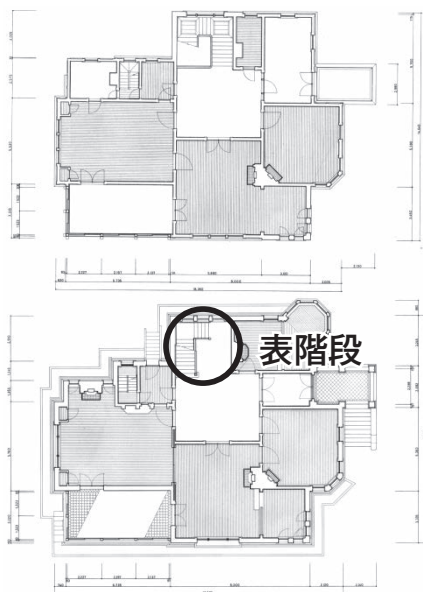


図 14 旧トーマス住宅 1 階（下）、2 階（上）平面図 財団法人文化財建造物保存技術協会『旧トーマス住宅 保存修理工事報告書』（神戸市 1985）



写真 24 表階段（撮影日：2015.3.17）

(1-12) 天鏡閣 (旧有栖川宮・高松宮翁島別邸)⁽²²⁾

・基礎データ

所在地：福島県耶麻郡猪苗代町大字翁沢字御

殿山 1048-14

竣工年：1908年（明治41年）

設計者：不明

建物面積：491.9 m²

構造形式：木造3階建て

重用文化財指定年月：1979年2月3日

備考：なし



写真 25 天鏡閣（撮影日：2014.12.19）

・概要

天鏡閣は、有栖川宮威仁親王が東北巡幸の際の別邸として1908年（明治41年）に建てられ、その後1924年（大正13年）高松宮家の所有となった洋風の住宅である。ルネッサンス様式で、気品のあふ、洗練された意匠がみられる。改造が少なく暖炉や照明器具、天井の漆喰飾りなどもよく残っている。従業員用の別館や、表門もほぼ同時期のものである。1979年2月3日に重要文化財に指定された。

天鏡閣の居室は洋室を中心に和室も取り入れた構成で、本研究では「洋風系住宅」と分類する。平面はコの字形のプランで、中廊下で南側に主室、北側に付属室等を配する。2階は客室や寝室等を設け、家族と接客兼用の空間である。2階へ接続する階段は「玄関ホール配置型」表階段①と、球戯室横の「廊下配置型」の表階段②、そして「廊下配置型」の裏階段がある。表階段①の形状は「直進系階段」であり、玄関からすぐ2階へ上がれること、2階が接客用の空間であることから、接客用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均9寸2分、蹴上平均6寸2分であり、勾配は35度となっている。階段の幅は3尺7寸6分である。表階段②の形状は「折れ系階段」であり、客室や浴室、2階が家族接客兼用の空間であることから、家族接客兼用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均8寸4分、蹴上平均6寸6分であり、勾配は37度となっている。階段の幅は3尺6寸3分である。裏階段の形状は「折れ系階段」であり、調理所の付近にあること、2階へ上がった先に女中室等があることから使用人用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均8寸7分、蹴上平均6寸6分であり、勾配は37度となっている。階段の幅は2尺4寸2分である。

表 18 天鏡閣 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1908	M41	天鏡閣	洋風系住宅	表	直進系階段	9寸2分	6寸2分	35	3尺7寸6分	13尺2寸	なし	玄関ホール配置型	玄関、応接室、食堂、便所、廊下	客室3、次の間、御座所、寝室、化粧室、御日拝所、女中室、侍医室、傳言官室、便所2、浴室	1.2階
				表(家族)	折れ系階段	8寸4分	6寸6分	37	3尺6寸3分		あり	廊下配置型	球戯室、付属室、廊下、浴室		
				裏(家族)	折れ系階段	8寸7分	6寸6分	37	2尺4寸2分		あり	廊下配置型	調理所、浴室		

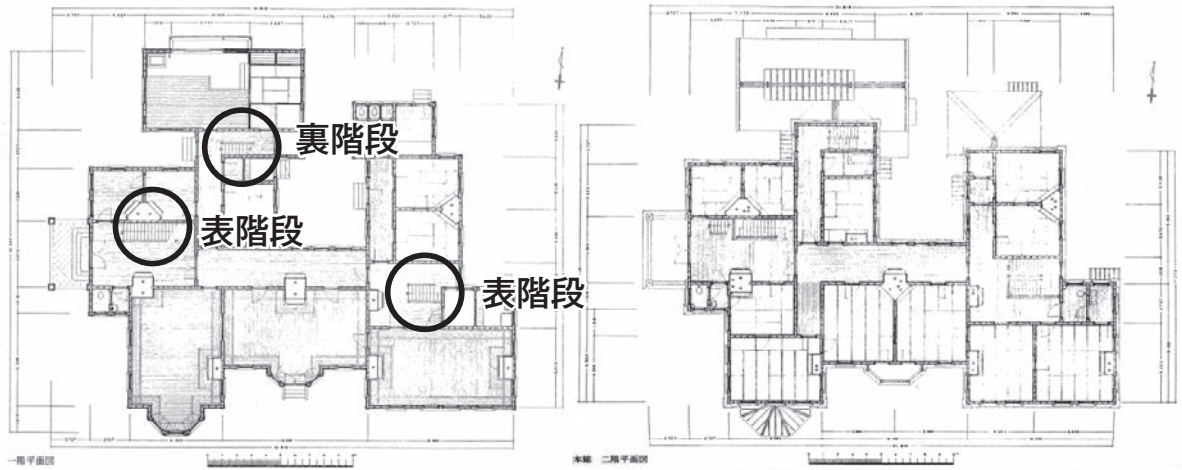


図15 天鏡閣1階(左)、2階(右)平面図 財団法人文化財建造物保存技術協会『重要文化財 天鏡閣本館・別館・表門 保存修理工事報告書』(福島県 1983)



写真26 表階段1 (撮影日: 2014. 12. 19)



写真27 表階段2 (撮影日: 2014. 12. 19)



写真28 裏階段 (撮影日: 2014. 12. 19)

(1-13) 旧内田家住宅⁽²³⁾

・基礎データ

所在地：横浜市中区山手町16（旧所在 東京都渋谷区南平台町）

竣工年：1910年（明治43年）

設計者：J. M. ガーディナー

建物面積：192.86 m²

構造形式：木造2階建て

重要文化財指定年月：1997年5月29日

備考：なし

・概要

旧内田家住宅は、ニューヨーク総領事やトルコ特命全権大使などを歴任した明治政府の外交官、内田定植の邸宅として、1910年（明治43年）にアメリカ人建築家のJ. M. ガーディナーの設計により建てられた洋風の住宅である。アメリカン・ヴィクトリアン様式を用い、外壁は下見板張りで、室内の家具や装飾にはアール・ヌーヴォーの意匠とともに、アーツ・アンド・クラフツのアメリカにおける影響もみられる。現在、和館は取り壊され、横浜山手に移築されている。1997年5月29日に重要文化財に指定された。

旧内田家住宅の居室は洋室を中心に構成され、本研究では「洋風系住宅」と分類する。平面は玄関ホールを中心とした構成である。2階は寝室や書斎など、家族用の空間である。2階へ接続する階段は「玄関ホール配置型」で、コの字型をした踊り場付きの折れ系階段であり、2階が家族用の空間であることから家族用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均8寸4分、蹴上平均5寸3分であり、勾配は33度となっている。階段の幅は平均3尺6寸3分である。



写真29 旧内田家住宅（撮影日：2015.3.5）

表19 内田家住宅 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1910	M43	旧内田家住宅	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸4分	5寸3分	33	3尺6寸3分	11尺9寸9分	あり	玄関ホール配置型	玄関、応接室、客間2、食堂、廊下、便所	書斎、寝室2、客室、婦人書斎、居室、納戸、浴室	1.2階

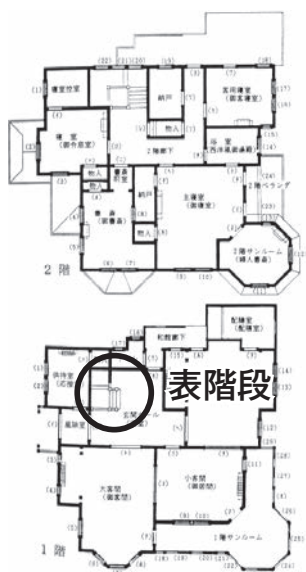


写真30 表階段（撮影日：2015.3.5）

←図16 旧内田家住宅1階（下）、2階（上）平面図 財団法人文化財建造物保存技術協会『外交官の家（旧内田家住宅）移築修理工事報告書』（横浜市都市計画局都市デザイン室 1997）

(1-14) 萬翠荘 (旧久松家別邸)⁽²⁴⁾

• 基礎データ

所在地：愛媛県松山市一番町 3-3-7

竣工年：1922 年（大正 11 年）

設計者：木子七郎

建物面積：397.76 m²

構造形式：鉄筋コンクリート 3 階建て、地下 1 階

重要文化財指定年月：2011 年 11 月 29 日

備考：裏階段は耐久性の関係から実測不可。

• 概要

萬翠荘は旧松山藩主の久松家の別邸として、木子七郎の設計により 1922 年（大正 11 年）に建てられた洋風の住宅である。マンサード屋根、2 階バルコニーの 3 連アーチの外観から内部まで、フランス・ルネサンス様式を基調とした意匠である。2011 年 11 月 29 日に重要文化財に指定された。

萬翠荘の居室は洋室を中心に構成され、本研究では「洋風系住宅」と分類する。平面は玄関ホールを中心とした構成で、水回り空間などの付属室へ中廊下が配されている。2 階は居間や寝室、応接室等で構成され、家族接客兼用の空間である。2 階へ接続する表階段は「玄関ホール配置型」で、踊り場付きの折れ系階段であり、2 階が家族接客兼用の空間であることから家族接客兼用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均 7 寸 8 分、蹴上平均 5 寸 9 分であり、勾配は 37 度となっている。階段の幅は 5 尺 2 寸 8 分である。



写真 31 萬翠荘（撮影日：2014. 12. 27）

表 20 萬翠荘 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1922	T11	萬翠荘	洋風系住宅	表	折れ系階段	7寸8分	5寸9分	37	5尺2寸8分	15尺4寸1分	あり	玄関ホール配置型	玄関、サロン、食堂、脱帽室、廊下2	居間、婦人室、書斎喫煙室、寝室3、応接室、居室2、待女居間、便所	1.2階

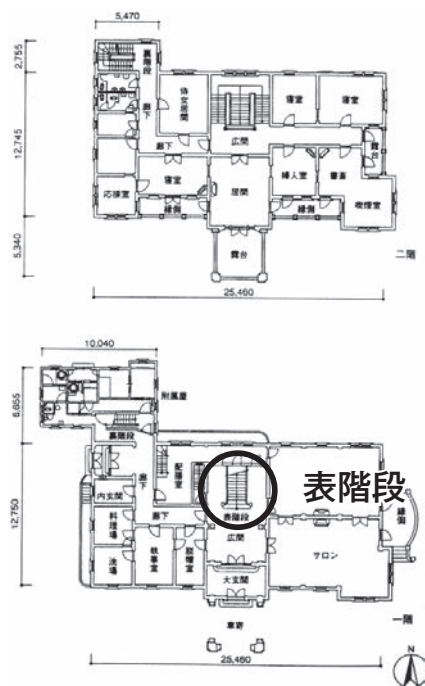


写真 32 表階段（撮影日：2014. 12. 27）

図 17 萬翠荘 1 階、2 階平面図 文化庁文化財部『月刊文化財 (579 号) : 4-5、15-29』(第一法規株式会社 2011)

(1-15) 旧前田家本邸 (洋館)⁽²⁵⁾

・基礎データ

所在地：東京都目黒区駒場 4-861

竣工年：1929 年（昭和 4 年）

設計者：高橋貞太郎

建物面積：978.25 m²

構造形式：鉄筋コンクリート造 2 階建て、地下 1 階

重要文化財指定年月：2013 年 8 月 7 日

備考：和館は耐震補強工事中のため、裏階段は非公開につき実測不可。



写真 33 旧前田家本邸 (洋館) (撮影日：2015.3.4)

・概要 旧前田家本邸 (洋館) は、旧加賀藩主前田家の邸宅として、1929 年（昭和 4 年）、高橋貞太郎の設計により建てられた洋風の住宅である。重厚な意匠でまとめられ、水回り空間も取り入れ、洋館だけで日常の生活が完結する。2013 年 8 月 7 日に重要文化財に指定された。

旧前田家本邸 (洋館) は洋室を中心に構成され、本研究では「洋風系住宅」と分類する。平面は玄関ホールと中庭を中心としたコの字形の構成である。2 階は寝室や子供の部屋で構成され、家族用の空間である。2 階へ接続する表階段は「玄関ホール配置型」で、踊り場付きのコの字形の折れ系階段であり、2 階が家族用の空間であることから家族用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均 8 寸 3 分、蹴上平均 5 寸 7 分であり、勾配は 34 度である。階段の幅は平均 5 尺 9 寸 4 分である。

表 21 旧前田家侯爵本邸 (洋館) 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1927	S2	旧前田家本邸 (洋館)	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸3分	5寸7分	34	5尺9寸4分	16尺1寸2分	あり	玄関ホール配置型	玄関、サロン、小客室、大客室、大食堂	寝室、婦人室、次女居室、書斎、長女居室、三男居室、三女居室、居室、夫人室	1階

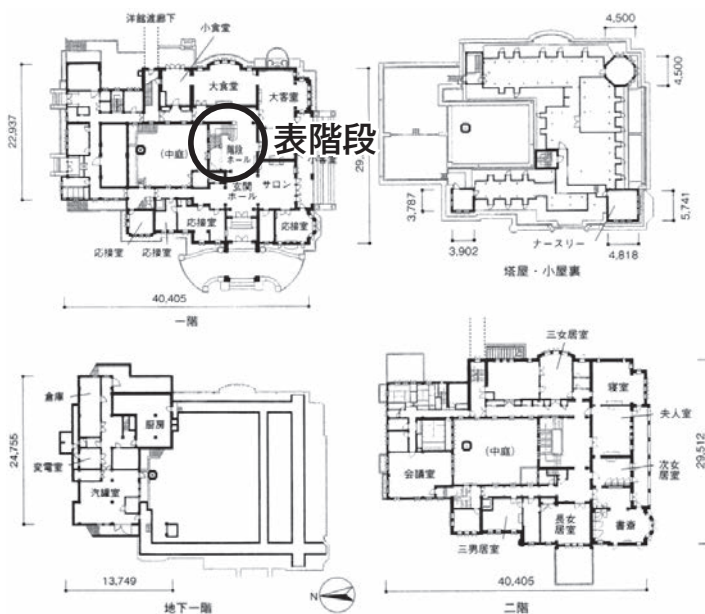


図 18 旧前田家本邸地下 1 階、1 階、2 階、塔屋平面図 文化庁文化財部『月刊文化財 (598 号) : 40-45』(第一法規株式会社 2013)



写真34 表階段（撮影日：2015.3.4）

(1-16) 旧青木家那須別邸⁽²⁶⁾

・基礎データ

所在地：栃木県那須塩原市青木 27 番地

2462・29 番地 6

竣工年：1888 年（明治 21 年）

設計者：松ヶ崎萬長

建物面積：318.9 m²

構造形式：木造 3 階建て

重用文化財指定年月：1999 年 12 月 1 日

備考：創建時の表階段は直進系階段であった

が、増改築の際折れ系階段へと改造されている。その年代は不明であるため、住宅がほぼ現在の姿となったとされる明治 42 年の階段とする。裏階段についても、一般公開の際、表階段が封鎖され、裏階段が使用されることから階段の幅を約 2 倍にしたとされている。現在の階段は創建時のものとは異なるが、詳細な時期は不明である。しかし昭和 10 年以降、増改築は行われていないとのことであり、少なくとも昭和 10 年以前に改造された階段であると推察される。

・概要

旧青木家那須別邸は、外交官として欧米を駆け巡り、明治時代に外務大臣を 3 度歴任した青木周蔵が明治 21 年に青木農場内に建てた洋風建築であり、鱗形のスレートで覆われた外壁に特色がある、洋風別荘である。創建時は 2 階建ての中央棟の部分のみであったが、中央棟東側の小食堂、居室、階段室がある附属棟や、最も東側の東翼棟（平屋建て）、中央棟西側の西翼棟の増築を重ね、明治 42 年にはほぼ現在の姿となった。1996 年から解体調査を行い、1998 年に元の位置から南東側約 50 m に移転して復元、改修し、1999 年 12 月 1 日に重要文化財に指定された。現在は道の駅「明治の森黒磯」の一施設として一般開放されている。

旧青木家那須別邸の居室は洋室を中心としているが、2 階に畳敷きの和室を導入しており、本研究では「洋風系住宅」と分類する。2 階は寝室二つと和室二つ、居室から構成されており、家族に重きを置いた空間であることがわかる。表階段は「玄関ホール配置型」で、コの字型の踊り場付きの折れ



写真 35 旧青木家那須別邸（撮影日：2014.12.20）

系階段であり、2階が家族空間を中心とした構成から、家族用の階段と推察される。その階段寸法は踏面平均8寸9分、蹴上平均6寸1分であり、勾配は34度となっている。階段の幅は2尺9寸7分である。裏階段は「廊下配置型」で、踊り場付きの折れ系階段であり、調理室等の水回り空間に配置されていることから使用人用の階段であることが推察される。その階段寸法は踏面平均9寸2分、蹴上平均6寸1分であり、勾配は33度となっている。

表 22 旧青木家那須別邸 基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客	
1888	M21	昭和 10	旧青木家那須別邸	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸9分	6寸1分	34	2尺9寸7分	12尺8寸2分	あり	玄関ホール配置型	玄関、主人室、使用人室、応接室、応接室、廊下、大食堂	寝室2、和室2、倉庫	1階
					裏	折れ系階段	9寸2分	6寸1分	33	1尺6寸5分		あり	廊下配置型	居室、納戸、大食堂、倉庫、浴室		

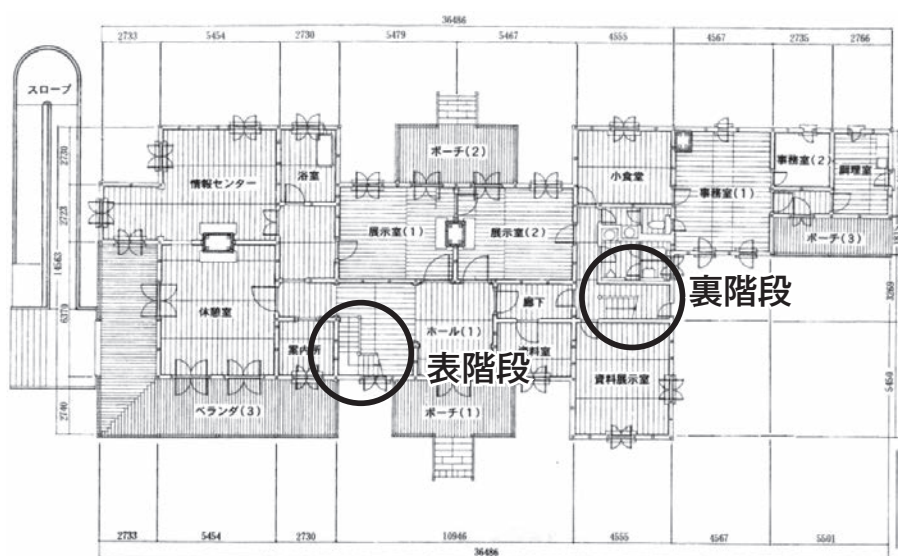


図 19 旧青木家那須別邸 1階平面図 岡田義治、磯忍『青木農場と青木周蔵那須別邸』(随想舎 2001)

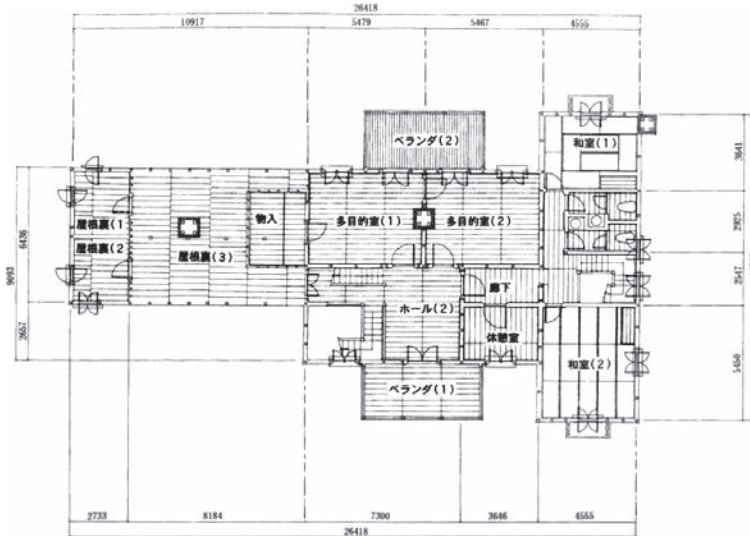


図 20 旧青木家那須別邸 2階平面図 岡田義治、磯忍『青木農場と青木周蔵那須別邸』(随想舎 2001)

(2) 階段形状や階段配置、踊り場の有無について

今回調査した住宅の階段形状や階段配置、踊り場の有無についてみていく。まず、和風系住宅の表階段の階段形状は、4/8例が折れ系階段であり、明治31年の旧広瀬家住宅からみられる。そのうち踊り場が設けられているのは3/4例である。また、4/4例が廊下配置型である。直進系階段は4/9例で、踊り場が設けられているものはなく、玄関ホール配置型と部屋配置型が各1例ずつみられ、2/4例が廊下配置型である。

裏階段の階段形状は1/7例が折れ系階段であり、踊り場が設けられ、廊下配置型である。直進系階段に関しては、6/7例みられ、踊り場が設けられているものは1例で、4/5例が廊下配置型で、1/5例が部屋配置型である(表23)。

次に洋風系住宅の表階段の階段形状は、8/9例が折れ系階段であり、そのうち踊り場が設けられているのは8/8例である。また、7/8例が玄関ホール配置型である。直進系階段に関しては、踊り場が設けられているものはなく、玄関ホール配置型であった。

裏階段の階段形状は2/2例が折れ系階段であり、そのうち踊り場が設けられているのは2/2例である。また、2/2例が廊下配置型である(表24)。

以上をまとめると、和風系住宅では明治31年から踊り場付きの折れ系階段を設ける例がみられ、全体でみても半数以上が折れ系階段を設けていた。しかし、折れ系階段を玄関ホールに配置する例はみられなかったものの、直進系階段を玄関ホールに配置する例はみられた。著者の書籍の研究でも、和風系住宅の階段は、階段形状の変化より先に階段配置が、廊下配置型から玄関ホール配置型に変化しており、この傾向がみられたものであると考える。また、洋風系住宅は折れ系階段を玄関ホールに配置する形式が多く、これに関しても文献をもととした分析結果のものと同様の傾向であることから、折れ系階段を玄関ホールに配置する形式は洋風系住宅の特徴であると考えられる。

表 23 和風系住宅の階段寸法を含む基礎データ

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1890	M23	旧吉山家住宅	和風系住宅	表	直進系階段	5寸8分	1尺2分	61	2尺7寸3分	8尺2寸1分	なし	部屋配置型	茶の間、使用人室、台所	使用人室	1階
				裏	直進系階段	6寸3分	8寸7分	63	1尺4寸5分		なし	部屋配置型	勝手口、脱衣所、勝手、茶の間		
1895	M28	旧西尾家住宅	和風系住宅	裏	直進系階段	5寸4分	8寸2分	57	2尺9寸7分	10尺6寸9分	なし	廊下配置型	座敷、次の間2、和室3	座敷、次の間、寝室、和室2	1.2階
1877	M10	明治31年 旧広瀬家住宅	和風系住宅	表	折れ系階段	6寸6分	7寸5分	48	2尺3寸9分	11尺2寸3分	あり	廊下配置型	座敷、次の間、居間2、茶の間、和室	座敷2、次の間、書斎	1.2階
1904	M37	高取家住宅(大座敷棟部分)	和風系住宅	表(接客)	直進系階段	6寸9分	5寸9分	44	4尺4寸1分	10尺3分	なし	玄関ホール配置型	玄関、座敷(能舞台等)、廊下、便所	座敷2、次の間	1.2階
				裏(接客)	折れ系階段	6寸5分	6寸6分	45	3尺	10尺3分	あり	廊下配置型	茶室、座敷(能舞台等)、廊下	座敷2、次の間	1.2階
1916	T5	旧毛利家本部	和風系住宅	表	折れ系階段	8寸	6寸	37	4尺6寸2分	16尺8寸6分	あり	廊下配置型	応接室、次の間、便所	座敷、次の間2、和室	1.2階
				裏	直進系階段	8寸5分	7寸1分	40	3尺9寸9分		なし	廊下配置型	便所		
1915	T7	高取家住宅(居室棟部分)	和風系住宅	表(家族)	直進系階段	8寸7分	6寸2分	36	3尺4寸4分	10尺3分	なし	廊下配置型	廊下、内玄関、書生室、和室、座敷、玄関	座敷4	1.2階
				裏(家族)	直進系階段	8寸7分	6寸2分	36	3尺		なし	廊下配置型	和室、台所、廊下	座敷4	1.2階
1919	T8	旧吉松家住宅	和風系住宅	表	折れ系階段	7寸4分	8寸	47	3尺1寸6分	9尺6寸2分	あり	廊下配置型	内玄関、茶の間、食堂	書斎、座敷、次の間	1階
1929	S4	石谷家住宅	和風系住宅	表	折れ系階段	7寸9分	7寸	42	2尺9寸7分	10尺6寸7分	なし	廊下配置型	次の間、座敷	座敷2、次の間3、神殿	1.2階
				裏	折れ系階段	7寸6分	6寸6分	49	2尺7寸7分		あり	廊下配置型	広間、勝手		
1931	S6	旧鍋島家住宅	和風系住宅	表	直進系階段	7寸	6寸9分	45	2尺9寸8分	11尺1寸	なし	廊下配置型	玄関、客間、和室	座敷、次の間	1.2階
				裏	直進系階段	6寸9分	6寸9分	45	2尺8寸6分		なし	廊下配置型	居間	寝室2	1階

表 24 洋風系住宅の階段寸法を含む基礎データ

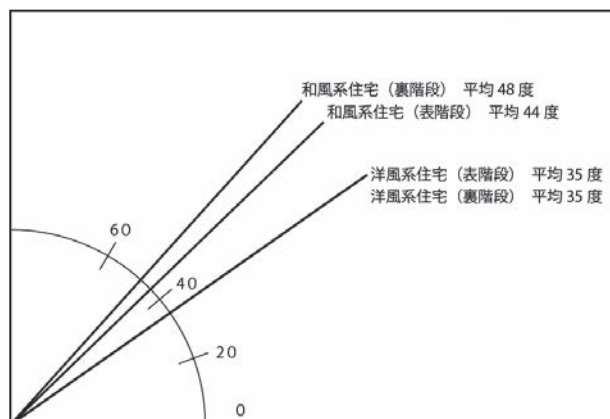
竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客	
1896	M29	旧岩崎家住宅(洋館)	洋風系住宅	表	折れ系階段	1尺	5寸9分	32	4尺2寸9分	16尺	あり	玄関ホール配置型	応接室、食堂、客室、婦人客室、書斎、配膳室、玄関ホール	客室2、婦人客室、寝室3、居室2、浴室、便所	1.2階	
1903	M36	小林家住宅	洋風系住宅	表	折れ系階段	7寸8分	6寸4分	39	3尺7寸7分	13尺5寸3分	あり	玄関ホール配置型	応接室、食堂、書斎、廊下	寝室2、子供室、化粧室、浴室	1階	
1904	M37	旧トーマス住宅	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸9分	6寸2分	35	4尺8分	13尺8寸2分	あり	玄関ホール配置型	書斎、応接室、食堂、居間	客間、客用寝室、寝室2、化粧室、浴室	1.2階	
1908	M41	天鏡閣	洋風系住宅	表	直進系階段	9寸2分	6寸2分	35	3尺7寸6分	13尺2寸	なし	玄関ホール配置型	玄関、応接室、食堂、便所、廊下	客室3、次の間、御座所、寝室、化粧室、御日拝所、女中室、待医室、傳育官室、便所2、浴室	1.2階	
				表(家族)	折れ系階段	8寸4分	6寸6分	37	3尺6寸3分		あり	廊下配置型	球戯室、付属室、廊下、浴室			
				裏(家族)	折れ系階段	8寸7分	6寸6分	37	2尺4寸2分		あり	廊下配置型	調理所、浴室			
1910	M43	旧内田家住宅	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸4分	5寸3分	33	3尺6寸3分	11尺9寸9分	あり	玄関ホール配置型	玄関、応接室、客間2、食堂、廊下、便所	書斎、寝室2、客室、婦人書斎、居室、納戸、浴室	1.2階	
1922	T11	萬翠荘	洋風系住宅	表	折れ系階段	7寸8分	5寸9分	37	5尺2寸8分	15尺4寸1分	あり	玄関ホール配置型	玄関、サロン、食堂、脱帽室、廊下2	居間、婦人室、書斎喫煙室、寝室3、応接室、居室2、待女居間、便所	1.2階	
1927	S2	旧前田家本邸(洋館)	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸3分	5寸7分	34	5尺9寸4分	16尺1寸2分	あり	玄関ホール配置型	玄関、サロン、小客室、大客室、大食堂	寝室、婦人室、次女居室、書斎、長女居室、三男居室、三女居室、居室、夫人室	1階	
1888	M21	昭和10	旧青木家那須別邸	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸9分	6寸1分	34	2尺9寸7分	12尺8寸2分	あり	玄関ホール配置型	玄関、主人室、使用人室、応接室、応接室、廊下、大食堂	寝室2、和室2、倉庫	1階
					裏	折れ系階段	9寸2分	6寸1分	33	1尺6寸5分		あり	廊下配置型	居室、納戸、大食堂、倉庫、浴室		

(3) 住宅の様式と表階段、裏階段による階段寸法の違いについて

階段寸法について、和風系住宅と洋風系住宅といった様式と、表階段と裏階段による階段寸法の違いについてみていく。

和風系住宅の表階段の勾配の最大は旧青山家住宅の61度であり、最小は旧高取家住宅(居室棟部分)の36度で、平均は44度である。階段の幅の最大は旧毛利家本邸の4尺6寸2分で最小は旧広瀬家住宅の2尺3寸9分で、平均は3尺1寸1分である。裏階段の勾配の最大は旧青山家住宅の63度であり、最小は旧高取家住宅(居室棟部分)の36度で、平均は48度で表階段より4度急である。階段の幅の最大は旧毛利家本邸の3尺9寸9分で最小は旧青山家住宅の1尺4寸5分で、平均は2尺8寸6分であり、表階段に比べ階段の幅は狭くつくられていることがわかる(表23、25)。

表 25 住宅様式による勾配



洋風系住宅の表階段の勾配の最大は小林家住宅の39度であり、最小は旧岩崎家住宅(洋館)の32度であり、平均は35度である。階段の幅の最大は旧前田家本邸(洋館)の5尺9寸4分で、最小は天鏡閣と旧内田家住宅の3尺6寸3分であり、平均は4尺2寸2分である。裏階段の勾配の最大は天鏡閣の37度であり、最小は旧青木家那須別邸の33度であり、平均は35度で表階段と同じ勾配である。階段の幅の最大は天鏡閣の2尺4寸

2分で、最小は旧青木家那須別邸の1尺6寸5分であり、平均は2尺3分であり、表階段に比べ階段の幅は狭くつくられていることがわかる（表24、25）。

以上をまとめると、和風系住宅に比べ洋風系住宅の表階段、裏階段は勾配が緩やかとなっており、洋風系住宅の裏階段の勾配は和風系住宅の表階段より緩やかにつくられ、住宅の様式による階段寸法の違いがみられた。なお、表階段、裏階段による階段寸法の違いをみると、和風系住宅では表階段の方が勾配は緩やかで階段の幅も広くつくられ、洋風系住宅に関しては、裏階段は階段の幅が狭くつくられているものの、勾配は表階段と大きな差はなくつくられていた。つまり、洋風系住宅は和風系住宅に比べ階段は広く緩やかにつくられ、裏階段も勾配は表階段と大きな差はなくつくられていたといえよう。

(4) 階段形状による階段寸法の違い

階段形状ごとに階段寸法をみて、階段形状による階段寸法の違いがみられるのか検討していく。

和風系住宅の直進系階段について、まず表階段のものをみると、勾配の最大は旧青山家住宅の61度であり、最小は高取家住宅（居住棟部分）の36度で、平均は47度である。階段の幅の最大は旧高取家住宅（居住棟部分）の4尺4寸1分で最小は旧青山家住宅の2尺7寸3分で、平均は3尺3寸4分である。裏階段をみると、直進系階段の勾配の最大は旧青山家住宅の63度であり、最小は旧高取家住宅（居住棟部分）の36度である。平均は48度で表階段より1度急である。階段の幅の最大は旧毛利家本邸の3尺9寸9分で最小は旧青山家住宅の2尺7寸3分である。平均は2尺8寸5分で表階段より狭い。

次に折れ系階段の表階段の例をみると、勾配の最大は旧広瀬家住宅の48度であり、最小は旧毛利家本邸の37度である。平均は43度で直進系階段より3度緩やかである。階段の幅の最大は旧毛利家住宅の4尺6寸2分で最小は旧青山家住宅の2尺7寸9分である。平均は3尺2寸3分と直進系階段と大きな差はない。裏階段は石谷家住宅の1例しかみられなかった（表23、26）。

洋風系住宅の直進系階段について、まず表階段のものは天鏡閣の1例のみであるが、その勾配は35度で和風系住宅の最小の勾配である旧高取家住宅（居住棟部分）の36度より緩やかである。裏階段の例はみられなかった。

折れ系階段の表階段の例についてみると、勾配の最大は小林家住宅の39度であり、最小は旧岩崎家住宅（洋館）の32度である。平均は35度である。階段の幅の最大は旧前田家住宅（洋館）の5尺9寸4分で最小は旧青木家那須別邸の2尺9寸7分である。平均は4尺2寸8分である。裏階段をみると、折れ系階段の勾配の最大は天鏡閣の37度であり、最小は旧青木家那須別邸の33度である。平均は35度で表階段と同じ勾配である。階段の幅の最大は旧青木家那須別邸の3尺2寸6分で最小は天鏡閣の2尺4寸2分である。平均は2尺8寸4分であり、表階段に比べ階段の幅は狭くつくられていることがわかる（表24、26）。

まとめると、まず和風系住宅の直進系階段は、折れ系階段と比べ階段の幅の大きな差はみられないが、勾配が急であることがわかり、階段形状による階段寸法の違いがみられた。また、同じ直進系階段、折れ系階段であっても、和風系住宅の階段より洋風系住宅の階段の方が緩やかで階段の幅も広くつくられていることがわかった。

(5) 階段配置による階段寸法の違い

階段配置毎に階段寸法をみて、階段配置による階段寸法の違いがみられるのか検討していく。

まず、和風系住宅の表階段についてみていくと、玄関ホール配置型である旧高取家住宅（大座敷棟）の階段は勾配が44度で幅が4尺4分1分であるのに対し、廊下配置型のものには勾配の平均が41度であるものの、階段の幅は3尺1寸3分で玄関ホール配置型に比べ狭い。また、部屋配置型は勾配が61度で幅も2尺7寸3分と最も急で狭い。裏階段の廊下配置型の勾配の平均は45度で表階段に比べ4度急である。幅は3尺1寸2分と表階段と違いはみられないが、部屋配置型の勾配は63度で幅は1尺4寸5分と表階段より急で狭いことがわかる（表23、27）。

洋風系住宅の表階段についてみていくと、玄関ホール配置型の階段の勾配は平均35度で幅は平均4尺2寸9分であるのに対し、廊下配置型の階段の勾配は37度で幅は3尺6寸3分と急で狭い。裏階段は2/2例が廊下配置型であり、勾配の平均は35度で幅の平均は2尺8寸4分である。（表24、27）。

まとめると、和風系住宅では玄関ホール配置型の階段は廊下配置型、部屋配置型より幅が広くつくられ、部屋配置型の階段が最も勾配が急で幅が狭いことがわかった。洋風系住宅においても、玄関ホール配置型の階段がもっとも勾配が緩やかで幅も広くつくられていた傾向がみられた。つまり、和風系住宅、洋風系住宅ともに玄関ホール配置型の階段が最も勾配が緩やか、または幅が広くつくられている傾向がみられた。

II 市街地建築物法による階段寸法の規定と建築家らが推奨した階段寸法について

(1) 市街地建築物法による階段寸法の規定について

わが国の建築に関する初の法制度は、大正8年4月4日に公布された市街地建築物法である。この市街地建築物法は建築基準法の前身にあたるもので、建築物の敷地や構造、設備等についての規定を定めたものである。その中で、階段に関する規定について、以下のように記されている。⁽²⁷⁾

第二十五条 階段の構造は左の規定に依るべし。但し避難階段其の他特殊の用途に供するものはこの限りに在らず。

表26 階段形状による勾配

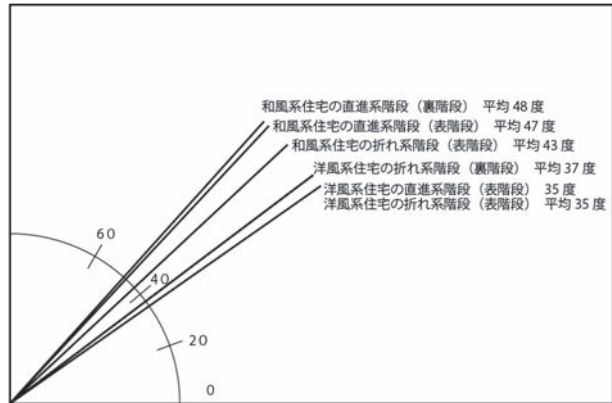
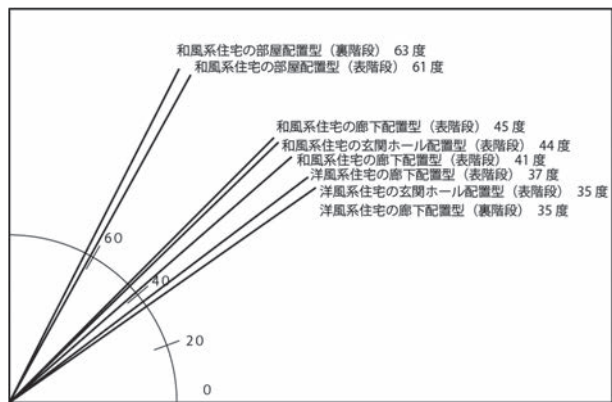


表27 階段配置による勾配



- 一 階段及踊り場の幅は内法二尺五寸以上と為すこと。
- 二 蹴上七寸五分以下踏面五寸以上と為すこと。
- 三 高十五尺を超えるものに在りては高一五尺以内毎に踊り場を設けること。

以上のように、避難階段や特殊な用途に使用される階段以外は、その階段及び、踊り場の幅を内法2尺5寸以上とし、蹴上は7寸5分以下、踏面を5寸以上、つまり勾配が56度以下とすることとし、また、階段の高さが15尺を超えるものは、十五尺ごとに踊り場を設けることとされている。

これらをもとに調査した住宅をみていくと、まず和風系住宅の表階段に関しては、大正8年以降、階段の幅が2尺5寸以上のものは3/3例で、勾配が56度以下のものも、3/3例である。大正8年以前に関しても階段の幅が2尺5寸以上のものは4/5例、勾配が56度以下のものも4/5例である。裏階段に関しては大正8年以降、階段の幅が2尺5寸以上のものは2/2例で、勾配が56度以下のものも2/2例である。大正8年以前に関しても階段の幅が2尺5寸以上のものは4/5例、勾配が56度以下のものは3/5例である（表28）。

次に洋風系住宅の表階段に関しては、大正8年以降、階段の幅が2尺5寸以上のものは3/3例で、勾配が56度以下のものも3/3例である。大正8年以前に関しては階段の幅が2尺5寸以上のものは6/6例、勾配が56度以下のものも6/6例である。裏階段に関しては今回調査したものでは大正8年以降のものはなかった。大正8年以前に関しては階段の幅が2尺5寸以上のものは1/2例、勾配が56度以下のものは2/2例である（表29）。

まとめると、大正8年公布の市街地建築物法により規定された避難階段や特殊な用途に使用される階段以外は、その階段及び、踊り場の幅を内法2尺5寸以上とし、蹴上は7寸5分以下、踏面を5寸以上、つまり勾配が56度以下とすることとし、また、階段の高さが15尺を超えるものは、15尺毎に踊り場を設けることとされていた。調査した住宅をみると、和風系住宅、洋風系住宅ともに大正8年以降の住宅の階段は規定に納まっており、また大正8年以前に関しても大半が規定に納まっていることがわかった。

表28 和風系住宅（点線が大正8年以降を表す）

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1890	M23	旧吉山家住宅	和風系住宅	表	直進系階段	5寸8分	1尺2分	61	2尺7寸3分	8尺2寸1分	なし	部屋配置型	茶の間、使用入室、台所	使用入室	1階
				裏	直進系階段	6寸3分	8寸7分	63	1尺4寸5分		なし	部屋配置型	勝手口、脱衣所、勝手、茶の間		
1895	M28	旧西尾家住宅	和風系住宅	裏	直進系階段	5寸4分	8寸2分	57	2尺9寸7分	10尺6寸9分	なし	廊下配置型	座敷、次の間2、和室3	座敷、次の間、寝室、和室2	1.2階
1877	M10	明治31年 旧広瀬家住宅	和風系住宅	表	折れ系階段	6寸6分	7寸5分	48	2尺3寸9分	11尺2寸3分	あり	廊下配置型	座敷、次の間、居間2、茶の間、和室	座敷2、次の間、書斎	1.2階
1904	M37	高取家住宅 (大座敷棟部分)	和風系住宅	表(接客)	直進系階段	6寸9分	5寸9分	44	4尺4寸1分	10尺3分	なし	玄関ホール配置型	玄関、座敷(能舞台等)、廊下、便所	座敷2、次の間	1.2階
				裏(接客)	折れ系階段	6寸5分	6寸6分	45	3尺	10尺3分	あり	廊下配置型	茶室、座敷(能舞台等)、廊下	座敷2、次の間	1.2階
1916	T5	旧毛利家本邸	和風系住宅	表	折れ系階段	8寸	6寸	37	4尺6寸2分	16尺8寸6分	あり	廊下配置型	応接室、次の間、便所	座敷、次の間2、和室	1.2階
				裏	直進系階段	8寸5分	7寸1分	40	3尺9寸9分		なし	廊下配置型	便所		
1915	T7	高取家住宅 (居室棟部分)	和風系住宅	表(家族)	直進系階段	8寸7分	6寸2分	36	3尺4寸4分	10尺3分	なし	廊下配置型	廊下、内玄関、書生室、和室、座敷、玄関	座敷4	1.2階
				裏(家族)	直進系階段	8寸7分	6寸2分	36	3尺		なし	廊下配置型	和室、台所、廊下、内玄関、茶の間、食堂	座敷4、書斎、座敷、次の間	1.2階
1919	T8	旧吉松家住宅	和風系住宅	表	折れ系階段	7寸4分	8寸	47	3尺1寸6分	9尺6寸2分	あり	廊下配置型	次の間、座敷	座敷2、次の間3、神殿	1階
1929	S4	石谷家住宅	和風系住宅	表	折れ系階段	7寸9分	7寸	42	2尺9寸7分	10尺6寸7分	なし	廊下配置型	広間、勝手	座敷2、次の間3、神殿	1.2階
				裏	折れ系階段	7寸6分	6寸6分	49	2尺7寸7分		あり	廊下配置型	玄関、客間、和室		
1931	S6	旧鍋島家住宅	和風系住宅	表	直進系階段	7寸	6寸9分	45	2尺9寸8分	11尺1寸	なし	廊下配置型	玄関、客間、和室	座敷、次の間	1.2階
				裏	直進系階段	6寸9分	6寸9分	45	2尺8寸6分		なし	廊下配置型	居間	寝室2	

表 29 洋風系住宅（点線が大正 8 年以降を表す）

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1896	M29	旧岩崎家住宅(洋館)	洋風系住宅	表	折れ系階段	1尺	5寸9分	32	4尺2寸9分	16尺	あり	玄関ホール配置型	応接室、食堂、客室、婦人客室、書斎、配膳室、玄関ホール	客室2、婦人客室、寝室3、居室2、浴室、便所	1.2階
1903	M36	小林家住宅	洋風系住宅	表	折れ系階段	7寸8分	6寸4分	39	3尺7寸7分	13尺5寸3分	あり	玄関ホール配置型	応接室、食堂、書斎、廊下	寝室2、子供室、化粧室、浴室	1階
1904	M37	旧トーマス住宅	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸9分	6寸2分	35	4尺8分	13尺8寸2分	あり	玄関ホール配置型	書斎、応接室、食堂、居間	客間、客用寝室、寝室2、化粧室、浴室	1.2階
1908	M41	天鏡閣	洋風系住宅	表	直進系階段	9寸2分	6寸2分	35	3尺7寸6分	13尺2寸	なし	玄関ホール配置型	玄関、応接室、食堂、便所、廊下	客室3、次の間、御座所、寝室、化粧室、御日拝所、女中室、侍医室、傳官室、便所2、浴室	1.2階
				表(家族)	折れ系階段	8寸4分	6寸6分	37	3尺6寸3分		あり	廊下配置型	球戯室、付属室、廊下、浴室		
				裏(家族)	折れ系階段	8寸7分	6寸6分	37	2尺4寸2分		あり	廊下配置型	調理所、浴室		
1910	M43	旧内田家住宅	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸4分	5寸3分	33	3尺6寸3分	11尺9寸9分	あり	玄関ホール配置型	玄関、応接室、客間2、食堂、廊下、便所	書斎、寝室2、客室、婦人書斎、居室、納戸、浴室	1.2階
1922	T11	萬翠荘	洋風系住宅	表	折れ系階段	7寸8分	5寸9分	37	5尺2寸8分	15尺4寸1分	あり	玄関ホール配置型	玄関、サロン、食堂、脱帽室、廊下2	書斎喫煙室、寝室3、応接室、居室2、侍女居間、便所	1.2階
1927	S2	旧前田家本邸(洋館)	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸3分	5寸7分	34	5尺9寸4分	16尺1寸2分	あり	玄関ホール配置型	玄関、サロン、小客室、大客室、大食堂	寝室、婦人室、次女居室、書斎、長女居室、三男居室、三女居室、居室、夫人室	1階
1888	M21	旧青木家那須別邸	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸9分	6寸1分	34	2尺9寸7分	12尺8寸2分	あり	玄関ホール配置型	玄関、主人室、使用人室、応接室、応接室、廊下、大食堂	寝室2、和室2、倉庫	1階
				裏	折れ系階段	9寸2分	6寸1分	33	1尺6寸5分		あり	廊下配置型	居室、納戸、大食堂、倉庫、浴室		

(2) 建築家らが推奨した階段寸法について

前述のように、大正 8 年に市街地建築物法により階段の寸法や踊り場に関する規定が設けられたが、「市街地建築法規によりますと、蹴上七寸五分以下、踏面は五寸以上ということになっております。しかしこれはこれ以上急にしてはいけないという極限を示したものでありまして、住宅の階段としましては、踏面八寸乃至九寸、蹴上六寸乃至七寸を適当とします。踏面の方は 9 寸としましても、段板の橋を前の方へ一寸ぐらい出しますから、実際は一尺位になります。」(山本 1931: 43-46) ⁽²⁸⁾ というように、建築家たちは市街地建築物法で規定された階段の寸法は最大、最小を示したものであり、それらに対し階段の適切な寸法について述べている(表 30)。

市街地建築物法の階段寸法の規定より、緩やかな寸法を推奨しているものは 10/29 例あり、今回対象とした書籍では、大正 13 年からみられる。その内容をみると、推奨している階段寸法の勾配が最小のものは「理想的の階段は蹴上五寸に踏面一尺内外である。」(木村 1928: 451-455) ⁽²⁹⁾ という勾配が 27 度のものである。それに対し、推奨している階段の勾配が最大のものは「住宅の階段としましては、踏面八寸乃至九寸、蹴上六寸乃至七寸を適当とします。」(山本 1931: 43-46) ⁽²⁸⁾ という勾配が 41 度のものである。また、「最も普通には、九尺を、九尺で昇る程度のが一番多い。」(長尾 1940: 51-53) ⁽³⁰⁾、「少なくとも 45 度以内としなければならない。」(西田 1941: 137-141) ⁽³¹⁾ といった記述のように、一般的な住宅の階段の勾配は 45 度位のものが多くみられ、少なくとも階段の勾配を 45 度以内にしなければならないということが窺われる。すなわち、推奨する階段の勾配は最小を 27 度、最大を 41 度とし、45 度を限度とすることがわかる。

上記の建築家たちが述べた階段寸法をもとに、調査した住宅をみていくと、和風系住宅の表階段に

表 30 建築家らが推奨した階段寸法に関する記述リスト

NO.	著作者	タイトル	発行者	発行年	記述内容	勾配
1	高橋鐵造	経済で便利な家の建て方	東亜堂書房	大正8年		
2	太田作	住み心地よき家の建て方	弘学館	大正9年		
3	納屋松蔵	経済本位の住宅	鈴木書店	大正9年		
4	笹治庄次郎	採光通風を主とする住みよき小住宅の設計	鈴木書店	大正9年		
5	近間佐吉	住み心地好き中流住宅	博文館	大正9年		
6	藤根大庭	理想の文化住宅	アルス	大正12年		
7	西村伊作	現代人の新住宅	文化生活研究会	大正13年	普通、蹴上六寸ぐらい、踏面九寸か一尺位でよいでしょう。	34度
8	W・M・ヴォーリス	吾家の設計	文化生活研究会	大正13年		
9	藤井漢	簡易洋風住宅の設計	鈴木書店	大正13年		
10	菊池修一郎	住み心地よき住宅と庭園	服部文貴堂	大正14年		
11	葛野壯一郎	住宅を新築せんとする人の為に	人文社	大正14年	少なくとも幅は三尺以上で、蹴上七寸以下、踏面八寸以上の昇降に危険の少ないものでなければなりません。	56度
12	坂口利夫	十坪より五十坪迄 模範住宅の設計	鈴木書店	大正15年		
13	西村伊作	現代人の新住家	文化生活研究会	大正15年	普通、蹴上六寸ぐらい、踏面九寸か一尺位でよいでしょう。	34度
14	木曾怒一	住宅と建築	誠文堂	昭和3年	理想的の階段は蹴上五寸に踏面一尺内外である。	27度
15	刀禰館正雄	朝日家庭業書 住の巻	朝日新聞	昭和5年	市街地建築物法では、階段の内法は、二尺五寸以上、蹴上は七寸五分以下、踏面は五寸以上と規定され、そして高さが十五尺以内毎に踊場を設ける事になっている。	56度
16	山本拙郎	和洋住宅設備設計の知識	実業之日本社	昭和6年	市街地建築法規によりますと、蹴上七寸五分以下、踏面は五寸以上ということになっております。しかしこれはこれ以上急にはいけないという極限を示したものでありまして、住宅の階段としましては、踏面八寸乃至九寸、蹴上六寸乃至七寸を適当とします。踏面の方は九寸としましても、段板の橋を前の方へ一寸ぐらい出しますから、実際は一尺位になります。	41度
17	増山新平	新時代の住宅設備	太陽社書店	昭和6年	市街地建築物法 蹴上七寸五分以下、踏面五寸以上これは許可し得べき極限をさだめたものであって、楽に昇り降り得るものではない。粗末に建てられた貸家などでやむをえずもちいられる。	
18	主婦之友社	初めて家を建てる人に必要な住宅の建て方	主婦之友社	昭和6年	階段の広さは、少なくとも三尺とし、余裕があれば、四尺くらいにしたいものです。大体蹴上は五寸ないし六寸、踏面八寸五分前後が大人に調度よく、子供の多い家庭では、蹴上を低くして、昇りやすいようにしたいものです。	35度
19	上原敬二	家の改造と庭の改造	金星堂	昭和6年		
20	張晋雄	中流住宅	通信協会	昭和7年		
21	京都建築協会	家を建てる人の為に	京都土木建築新	昭和7年	階段は幅七十六樞以上は必要にして成るべく屈折階段を可とし、その傾斜には適当なる程度あり、各段の蹴上十六樞、踏面二十七樞位を適当とすべし。	30度
22	富永襄吉	中流住宅建築	資文堂書店	昭和8年	蹴上六寸位にて、踏面八寸二、三分が、一番昇降に容易なる方法とされている。規則では蹴上を七寸五分以下、踏面は五寸以上と定められている。階段の内法は二尺五寸以上とし、間数が十個以上ある二階建てには主要階段の他に、勝手周りの近くに、勝手用の階段を増設する必要がある。この階段は実用向きのものなれば、勾配も主要階段よりもやや急にしても差し支えないのである。	36度
23	佐久間田之助	日本建築工作法	吉田工務所出版	昭和10年		
24	武田五一	住宅建築要義	文献書院	昭和12年		
25	平尾善保	最新住宅読本	日本電話建物株式会社出版部	昭和13年		
26	西村久二	新住宅の設計と施工	第一書房	昭和14年	適当なる寸法は、蹴上と踏面を足したものが一尺四、五寸ぐらいになるようになるか、または蹴上の寸法を二倍にしたものと踏面を足したものが、二尺乃至二尺二寸ぐらいになれば丁度宜しい。 蹴上七寸、踏面七寸位でも丁度宜しいが、蹴上六寸五分ぐらいで踏面八寸か九寸ぐらいのものが一番いい寸法です。	39度
27	長尾勝馬	新しい住宅の間取り	横山書店	昭和15年	普通の住宅では、九尺の高さを、六尺の長さで昇る割合が、一番急な勾配です。最も普通には、九尺を、九尺で昇る程度が一番多い。	56度
28	廣江文彦	理想の小住宅	鈴木書店	昭和15年		
29	西田竹治	新住宅の研究	コロナ社	昭和16年	市街地建築物法規にも制限してある通り、階段及び踊り場の幅は、内法幅七十五センチメートル以上とあるが、これは最小限度を指名したものであるから、階上に三室以上有する場合は、少なくとも90センチメートル以上とすべきで、また五室以上の場合は、表階段と裏階段との二箇所設けるのが便利であろう。また蹴上二十三センチメートル以下、踏面十五センチメートル以上とあるが、これも右同様、最大及び最小の限度を示したものであるから、この方法で施工すれば、従来の和風住宅に行われている、三尺の六尺の処に設ける階段となって、頗る急で手ずりがなくては容易に昇降の出来ない危険なものとなる。また従来の角度からみれば約五十六度となるものであるが、少なくとも45度以内としなければならぬ。また階高に対しては、四、五メートルを超えるものにありては、高四、五メートル以内毎に踊り場を設けて、楽に昇降の出来るようになすべきである。	45度以内

関しては、大正13年以降、27度から41度に納まっているものはなく、45度以内のものは2/2例である。大正13年以前に関しては、27度から41度に納まっているものは2/6例であり、45度以内のものは3/6例である。裏階段に関しては大正13年以降、27度から41度に納まっているものはみられなく、45度以内のものは1/2例である。大正13年以前に関しては、27度から41度に納まってい

表 31 和風系住宅（右に矢印がある点線が大正 13 年以降を表す）

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1890	M23	旧吉山家住宅	和風系住宅	表	直進系階段	5寸8分	1尺2分	61	2尺7寸3分	8尺2寸1分	なし	部屋配置型	茶の間、使用入室、台所	使用入室	1階
				裏	直進系階段	6寸3分	8寸7分	63	1尺4寸5分		なし	部屋配置型	勝手口、脱衣所、勝手、茶の間		
1895	M28	旧西尾家住宅	和風系住宅	裏	直進系階段	5寸4分	8寸2分	57	2尺9寸7分	10尺6寸9分	なし	廊下配置型	座敷、次の間2、和室3	座敷、次の間、寝室、和室2	1.2階
1877	M10	明治31年 旧広瀬家住宅	和風系住宅	表	折れ系階段	6寸6分	7寸5分	48	2尺3寸9分	11尺2寸3分	あり	廊下配置型	座敷、次の間、居間2、茶の間、和室	座敷2、次の間、書斎	1.2階
1904	M37	高取家住宅(大座敷棟部分)	和風系住宅	表(接客)	直進系階段	6寸9分	5寸9分	44	4尺4寸1分	10尺3分	なし	玄関ホール配置型	玄関、座敷(能舞台等)、廊下、便所	座敷2、次の間	1.2階
				裏(接客)	折れ系階段	6寸5分	6寸6分	45	3尺	10尺3分	あり	廊下配置型	茶室、座敷(能舞台等)、廊下	座敷2、次の間	1.2階
1916	T5	旧毛利家本邸	和風系住宅	表	折れ系階段	8寸	6寸	37	4尺6寸2分	16尺8寸6分	あり	廊下配置型	応接室、次の間、便所	座敷、次の間2、和室	1.2階
				裏	直進系階段	8寸5分	7寸1分	40	3尺9寸9分		なし	廊下配置型	便所		
1915	T7	高取家住宅(居室棟部分)	和風系住宅	表(家族)	直進系階段	8寸7分	6寸2分	36	3尺4寸4分	10尺3分	なし	廊下配置型	廊下、内玄関、書生室、和室、座敷、玄関	座敷4	1.2階
				裏(家族)	直進系階段	8寸7分	6寸2分	36	3尺		なし	廊下配置型	和室、台所、廊下内玄関、茶の間、食堂	座敷4	1.2階
1919	T8	旧吉松家住宅	和風系住宅	表	折れ系階段	7寸4分	8寸	47	3尺1寸6分	9尺6寸2分	あり	廊下配置型	内玄関、茶の間、食堂	書斎、座敷、次の間	1階
1929	S4	石谷家住宅	和風系住宅	表	折れ系階段	7寸9分	7寸	42	2尺9寸7分	10尺6寸7分	なし	廊下配置型	次の間、座敷	座敷2、次の間3、神龕	1.2階
1931	S6	旧鶴島家住宅	和風系住宅	表	直進系階段	7寸	6寸9分	45	2尺9寸8分	11尺1寸	なし	廊下配置型	玄関、客間、和室	座敷、次の間	1.2階
				裏	直進系階段	6寸9分	6寸9分	45	2尺8寸6分		なし	廊下配置型	居間	寝室2	1階

表 32 洋風系住宅（右に矢印がある点線が大正 13 年以降を表す）

竣工年	階段の改造	建物名	様式	階段表裏	階段種類	踏面	蹴上	勾配(度)	幅	階高	踊り場	階段配置	隣接空間	2階	接客
1896	M29	旧岩崎家住宅(洋館)	洋風系住宅	表	折れ系階段	1尺	5寸9分	32	4尺2寸9分	16尺	あり	玄関ホール配置型	応接室、食堂、客室、婦人客室、書斎、配膳室、玄関ホール	客室2、婦人客室、寝室3、居間2、浴室、便所	1.2階
1903	M36	小林家住宅	洋風系住宅	表	折れ系階段	7寸8分	6寸4分	39	3尺7寸7分	13尺5寸3分	あり	玄関ホール配置型	応接室、食堂、書斎、廊下	寝室2、子供室、化粧室、浴室	1階
1904	M37	旧トーマス住宅	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸9分	6寸2分	35	4尺8分	13尺8寸2分	あり	玄関ホール配置型	書斎、応接室、食堂、居間	客間、客用寝室、寝室2、化粧室、浴室	1.2階
1908	M41	天鏡閣	洋風系住宅	表	直進系階段	9寸2分	6寸2分	35	3尺7寸6分	13尺2寸	なし	玄関ホール配置型	玄関、応接室、食堂、便所、廊下	客室3、次の間、御座所、寝室、化粧室、御日拝所、女中室、待医室、傳育官室、便所2、浴室	1.2階
				表(家族)	折れ系階段	8寸4分	6寸6分	37	3尺6寸3分		あり	廊下配置型	球戯室、付風呂室、廊下、浴室		
				裏(家族)	折れ系階段	8寸7分	6寸6分	37	2尺4寸2分		あり	廊下配置型	調理所、浴室		
1910	M43	旧内田家住宅	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸4分	5寸3分	33	3尺6寸3分	11尺9寸9分	あり	玄関ホール配置型	玄関、応接室、客間2、食堂、廊下、便所	書斎、寝室2、客室、婦人書斎、居間、納戸、浴室	1.2階
1922	T11	萬翠荘	洋風系住宅	表	折れ系階段	7寸8分	5寸9分	37	5尺2寸8分	15尺4寸1分	あり	玄関ホール配置型	玄関、サロン、食堂、脱帽室、廊下2	居間、婦人室、書斎喫煙室、寝室3、応接室、居室2、侍女居間、便所	1.2階
1927	S2	旧前田家本邸(洋館)	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸3分	5寸7分	34	5尺9寸4分	16尺1寸2分	あり	玄関ホール配置型	玄関、サロン、小客室、大客室、大食堂	寝室、婦人室、次女居室、書斎、長女居室、三男居室、三女居室、居室、夫人室	1階
1888	M21	昭和10 旧青木家那須別邸	洋風系住宅	表	折れ系階段	8寸9分	6寸1分	34	2尺9寸7分	12尺8寸2分	あり	玄関ホール配置型	玄関、主人室、使用入室、応接室、廊下、大食堂	寝室2、和室2、倉庫	1階
				裏	折れ系階段	9寸2分	6寸1分	33	1尺6寸5分		あり	廊下配置型	居室、納戸、大食堂、倉庫、浴室		

るものは2/5例で、45度以内のものは3/5例である（表 31）。

洋風系住宅の表階段に関しては、大正 13 年以降、27 度から 41 度に納まっているものは 2/2 例である。大正 13 年以前に関しては、27 度から 41 度に納まっているものは 7/7 例である。裏階段に関して、今回調査したものでは大正 13 年以降のものはなかった。大正 13 年以前に関しては、27 度から 41 度に納まっているものは 2/2 例である（表 32）。

まとめると、大正 8 年公布の市街地建築物法により階段の規定がされたが、建築家たちは市街地建

築物法に規定された階段寸法は最低限のものとし、大正13年頃から適切な階段寸法について述べていた。その推奨した階段の勾配は最小27度、最大41度で、少なくとも45度を限度としていた。調査した住宅をみると、まず大正13年以降の和風系住宅の表階段は、27度から41度に納まっているものはないが、1/2例が45度以内には納まっていた。洋風系住宅の表階段は2/2例が27度から41度に納まっていた。すなわち大正13年以降の和風系住宅、洋風系住宅の表階段は、建築家たちが推奨した勾配27度から41度に納まらないものもみられるが、限度とした45度には納まっていることがわかった。裏階段に関しては45度に納まっていないものもみられ、「勾配も主要階段よりもやや急(32)にしても差し支えないのである。」(富永1933年)というように裏階段は表階段に比べ、勾配を急にしても差し支えないものとされていたことが窺われる。

おわりに

これまで、戦前期に建てられた重要文化財の2階建ての住宅17棟を対象とし、階段の蹴上、踏面、幅といった階段寸法の実測で得られたデータをもとに、階段形状、配置場所、階段の用途や、和風や洋風といった住宅の様式による階段寸法の違いを検討してきた。以下、項目ごとにまとめた。

・階段形状や階段配置、踊り場の有無について

今回対象とした住宅の中で、和風系住宅では明治31年から踊り場付きの折れ系階段を設ける例がみられ、全体でも半数以上が折れ系階段を設けていた。しかし、折れ系階段を玄関ホールに配置する例はみられなかったものの、直進系階段を玄関ホールに配置する例はみられた。著者の文献をもととした分析結果でも、和風系住宅の階段は、階段形状の変化より先に階段配置が、廊下配置型から玄関ホール配置型に変化しており、この傾向がみられたものであると考える。また、洋風系住宅は折れ系階段を玄関ホールに配置する形式が多く、これについても文献の分析と同様の傾向であることから、折れ系階段を玄関ホールに配置する形式は洋風系住宅の特徴であると考えられる。

・住宅の様式と表階段、裏階段による階段寸法の違いについて

和風系住宅に比べ、洋風系住宅の表階段、裏階段は勾配が緩やかとなっており、加えて洋風系住宅の裏階段の勾配は和風系住宅の表階段より緩やかにつくられ、住宅の様式による階段寸法の違いがみられた。また、表階段、裏階段による階段寸法の違いをみると、和風系住宅では表階段の方が勾配は緩やかで階段の幅も広くつくられ、洋風系住宅に関しては、裏階段は階段の幅が狭いものの、勾配は表階段と大きな差はなくつくられていた。つまり、洋風系住宅は和風系住宅に比べ階段は広く緩やかにつくられ、裏階段も勾配は表階段と大きな差はなくつくられていたことがわかる。

・階段形状による階段寸法の違い

和風系住宅の直進系階段は、折れ系階段と比べ階段の幅の大きな差はみられないが、勾配が急であることがわかり、階段形状による階段寸法の違いがみられた。また、同じ直進系階段、折れ系階段であっても、和風系住宅の階段より洋風系住宅の階段の方が緩やかで階段の幅も広くつくられているこ

とがわかった。

- 階段配置による階段寸法の違い

和風系住宅では玄関ホール配置型の階段は、廊下配置型、部屋配置型より幅が広くつくられ、部屋配置型の階段が最も勾配が急で幅が狭いことがわかった。洋風系住宅においても、玄関ホール配置型の階段がもっとも勾配が緩やかで幅も広くつくられていた傾向がみられ、和風系住宅、洋風系住宅ともに玄関ホール配置型の階段が最も勾配が緩やか、または幅が広くつくられている傾向がみられた。

- 市街地建築物法による階段寸法の規定と建築家らが推奨した階段寸法について

大正8年公布の市街地建築物法により規定された避難階段や特殊な用途に使用される階段以外は、その階段及び、踊り場の幅を内法2尺5寸以上とし、蹴上は7寸5分以下、踏面を5寸以上、つまり勾配が56度以下とすることとし、また、階段の高さが15尺を超えるものは、15尺毎に踊り場を設けることとされていた。調査した住宅をみると、和風系住宅、洋風系住宅ともに、大正8年以降の住宅の階段は規定に納まっており、また、大正8年以前に関しても大半が規定に納まっていることがわかった。しかし、建築家たちは市街地建築物法に規定された階段寸法は最低限のものとし、大正13年頃から適切な階段寸法について述べていた。その推奨した階段の勾配は最小27度、最大41度で、少なくとも45度を限度としていた。調査した住宅をみると、大正13年以降の和風系住宅、洋風系住宅の表階段は、洋風系住宅に関しては建築家たちが推奨した勾配27度から41度に納まり、和風系住宅も限度とした45度には納まっているものもみられた。裏階段に関しては45度に納ま⁽³²⁾っていないものもみられ、「勾配も主要階段よりもやや急にしても差し支えないのである。」(富永1933年)というように裏階段は表階段に比べ、勾配を急にしても差し支えないものとされていたことが窺われる。

以上のことから、戦前期の日本の住宅に設けられる階段は、まず、住宅の様式による階段寸法の違いがみられ、洋風系住宅では表階段と裏階段の勾配は同様につくられ、和風系住宅では表階段に比べ裏階段は勾配が急で幅も狭くつくられていたことがわかった。また、和風系住宅に設けられる折れ系階段は直進系階段より勾配が緩やかで、直進系階段であっても玄関ホールに配置した場合は他の配置されたものより勾配が緩やかで、幅も広くつくられていた。つまり、戦前期の日本の住宅の階段は、西洋の住宅のように玄関ホールに折れ系階段を配置する形式へと変化する中で、その階段寸法においても、西洋の住宅のように勾配を緩やかに広くつくる傾向であったことが明らかとなった。

謝辞

本研究を進めるにあたり、実測調査の際ご協力いただきました方々や非文字資料研究センターの方々に、心より感謝の意を表し、厚く御礼を申し上げます。本論文は2014年度・非文字資料研究センターの奨励研究成果論文として提出したもので、今回初めて文字に起こせることができました。心から感謝申し上げます。

註

(1) 江面嗣人『昭和前期の東京の町家形式とそれに対する市街地建築物法の影響——中央区を例として』

- (日本建築学会計画系論文報告集 1990)
- (2) 立川智浩、丹波和彦『わが国近代の住宅における「二階」の展開』(日本建築学会学術講演梗概集 2003)
 - (3) 日本に建てられた洋風の住宅も指す。
 - (4) 古俣和将『「階段」から見たわが国戦前期の住宅の変遷に関する一考察——戦前期に刊行された住宅関連書籍を主史料として——』(日本建築学会学術講演梗概集 2014)
 - (5) 菊池修一郎『住み心地よき住宅と庭園』(服部文貴堂 1925)
 - (6) 間取り図の分析で、洋風系住宅では折れ系Cタイプの階段の割合が高かったため。
 - (7) 古俣和将『わが国戦前期の住宅の「階段」形状の変遷に関する一考察その2——戦前期に刊行された住宅関連書籍を主史料として——』(日本生活学会大会 2015)
 - (8) 保岡勝也『和風を主とする折衷小住宅 第28図』(鈴木書店 1927)
 - (9) 保岡勝也『洋風を主とする折衷小住宅 第14図』(鈴木書店 1927)
 - (10) 住宅の様式、階段形状、階段配置の分類に関しては、著者のこれまでの研究と同様の分類方法を用いる。表階段と裏階段については、一つの住宅に2つ以上階段が設けられている場合、2階の居室や、配置空間等から接客用や家族用に使用したと推測され、かつ人目につく場所に配置された階段を表階段とし、使用人用に使用したと推測されるものや、押入等、階段を隠せる人目を避けた場所に配置した階段を裏階段とする。
 - (11) 文化庁文化財部『月刊文化財(448号):14-17、28-31』(第一法規株式会社 2001)
 - (12) 文化庁文化財部『月刊文化財(555号):12-20』(第一法規株式会社 2009)
 - (13) 旧広瀬邸文化財調査委員会『別子銅山の近代化を見守った広瀬邸——旧広瀬邸建造物調査報告書——』(新居浜市教育委員会 2002)
 - (14) 公益財団法人文化財建造物保存技術協会『旧高取家 主屋(居室棟・大広間棟)他7棟 保存修理工事報告書』(唐津市教育委員会 2002)
 - (15) 文化庁文化財部『月刊文化財(579号):4-5、15-29』(第一法規株式会社 2011)
 - (16) 文化庁文化財部『月刊文化財(543号):18-20』(第一法規株式会社 2008)
 - (17) 文化庁文化財部『月刊文化財(555号):12-20』(第一法規株式会社 2009)
 - (18) 文化庁文化財部『月刊文化財(614号):24-26』(第一法規株式会社 2014)
 - (19) 公益財団法人文化財建造物保存技術協会『重要文化財 旧岩崎家住宅(洋館・撞球室・大広間・附煉瓦塀)保存修理工事報告書』(文化庁 2005)
 - (20) 公益財団法人文化財建造物保存技術協会『重要文化財小林家住宅修理工事報告書』(重要文化財小林家住宅修理委員会 1989)
 - (21) 公益財団法人文化財建造物保存技術協会『旧トーマス住宅 保存修理工事報告書』(神戸市 1985)
 - (22) 公益財団法人文化財建造物保存技術協会『重要文化財 天鏡閣本館・別館・表門保存修理工事報告書』(福島県 1983)
 - (23) 公益財団法人文化財建造物保存技術協会『外交官の家(旧内田家住宅)移築修理工事報告書』(横浜市都市計画局都市デザイン室 1997)
 - (24) 文化庁文化財部『月刊文化財(579号):4-5、15-29』(第一法規株式会社 2011)
 - (25) 文化庁文化財部『月刊文化財(598号):40-45』(第一法規株式会社 2013)
 - (26) 岡田義治、磯忍『青木農場と青木周蔵那須別邸』(随想舎 2001)
 - (27) 岸原三郎『市街地建築物法規集』(洪洋社 1921)
 - (28) 山本拙郎『和洋住宅設備設計の知識:43-46』(実業之日本社 1931)
 - (29) 木檜怒一『住宅と建築:451-455』(誠文堂 1928)
 - (30) 長尾勝馬『新しい住宅の間取り:51-53』(横山書店 1940)
 - (31) 西田竹治『新住宅の研究:137-141』(コロナ社 1941)

(32) 富永襄吉『中流住宅建築』(資文堂書店 1933)